

## 平成24年度 関西大学博物館実習

平成24年度の関西大学博物館実習は、受講者54名で、内訳は表の通りである。博物館実習のカリキュラムは、後掲の「平成24年度関西大学博物館実習日程」とおり実施した。関西大学では博物館実習を通年授業として設けており、金曜日の4時限～5時限のクラスと、土曜の4時限～5時限のクラスが、それぞれ学内での博物館実習と学外見学実習を行っている。

春学期には、「資料の基礎的な取り扱い」から「資料の梱包」、「資料の調書の取り方」へと段階的に実習し、あわせて月に1度程度日曜日を利用した近畿圏の博物館・美術館施設の見学実習を行ない、博物館における学芸業務全般についての基礎的な知識の習得を行うようにしている。

秋学期には、実習生による「関西大学博物館実習展」の開催に向けて具体的な作業を行う。この「博物館実習展示会」は、習得した学芸業務についての知識と経験、受講生の専門分野や興味を基に、グループを結成して準備、実施する展示会で、博物館実習の集大成としての行事である。今年度は、学生グループが自主的に5つのテーマを設定し、展示資料の借用交渉と展示方法などの折衝を続け、充実した内容での展示会を実施することができた。内容と来館者アンケートの結果を、実習展の報告として収録した。

実習展終了後には博物館関連科学や研究活動についての実習と講義、講義最終日は実習の反省会を開催して、平成24年度の博物館実習のカリキュラムを終了した。

平成24年度の博物館実習担当者は、本学教員とともに博物館・美術館や研究機関、行政機関に所属される学芸員、専門担当者を委嘱した。

### 平成24年度 担当教員

米田文孝 文学部教授

黒田一充 文学部教授

原田正俊 文学部教授

橋寺知子 環境都市工学部准教授

森 隆男 文学部教授

西本昌弘 文学部教授

高橋隆博 文学部名誉教授

林 進 元大和文華館

河合正人 元あやめ池自然博物館

北川博子 阪急文化財団

西川卓志 西宮市立郷土資料館

伊藤信明 和歌山県立文書館

文珠省三 大阪歴史博物館

河内國平 刀匠

佃 一輝 一茶菴宗家

明尾圭造 大阪商業大学商業史博物館

伊藤健司 元興寺文化財研究所

一瀬和夫 京都橘大学教授

山内紀嗣 天理大学附属天理参考館

熊 博毅 関西大学博物館

山口卓也 関西大学博物館

# 平成24年度 関西大学 「博物館実習」 日程

授業時間 1組：金曜日 4・5時限 (14:40～17:50)  
2組：土曜日 4・5時限 (14:40～17:50)

※24.4.5

月	1組 (金曜)		2組 (土曜)	
	A	B	A	B
6/金	担当者全員 第1学舎5号館E210教室 高橋(隆)	クラス編成、実習簿・日程表配布等	担当者全員 第1学舎1号館A504教室 高橋(隆)	クラス編成、実習簿・日程表配布等
13/金	博物館実習室	文化財保護法の解説	博物館実習室	文化財保護法の解説
20/金	山内 博物館展示室	考古資料の取り扱い 博物館実習室	伊藤(信) 博物館展示室	考古資料の取り扱い 博物館実習室
27/金	林 博物館実習室	歴史資料の取り扱い 都市遺産セミナー室	伊藤(信) 古文書実習室(第1学舎4号館2階)	歴史資料の取り扱い 博物館実習室
4/金	みどりの日(祝日)		こどもの日(祝日)	
11/金	山内 都市遺産セミナー室	美術資料の取り扱い 博物館展示室	北川 博物館実習室	美術資料の取り扱い 博物館展示室
18/金	黒田 博物館実習室	民俗資料の取り扱い 博物館展示室	黒田 博物館実習室	民俗資料の取り扱い 博物館展示室
5/金	西本 博物館実習室	文書資料の取り扱い 博物館実習室	原田 博物館実習室	文書資料の取り扱い 博物館実習室
25/金	明尾 都市遺産セミナー室	美術資料の調書の取り方 梱包と借用の仕方	文殊 博物館展示室	考古資料の調書の取り方 梱包と借用の仕方
27/日	森・石立 大阪城天守閣・大阪歴史博物館	博物館等施設見学	文殊 博物館展示室	民俗資料の調書の取り方 梱包と借用の仕方
1/金	林 博物館実習室	歴史資料の調書の取り方 梱包と借用の仕方	伊藤(信) 古文書実習室	歴史資料の調書の取り方 博物館実習室
8/金	山内 博物館展示室	考古資料の調書の取り方 梱包と借用の仕方	北川 博物館実習室	美術資料の調書の取り方 博物館展示室
10/日	明尾・石立 ①藤表良工房 他	博物館等施設見学 (選択制 6/10と9/14、9/20実施の見学先のうちどれかを選択して参加のこともよい)	北川 博物館実習室	考古資料の調書の取り方 博物館展示室
15/金	米田・森 博物館実習室	夏季休暇中の日程表配布及び実習展の説明・班編成	米田・森 博物館実習室	夏季休暇中の日程表配布及び実習展の説明・班編成
22/金	6/22振替 ※可能なら6月23日(土)開催の全国大学博物館学講座協議会全国大会に参加のこと			全国大学博物館学講座協議会全国大会 聴講(1組・2組全員)
29/金	河合 博物館実習室	自然史資料の保存と整理	河合 博物館実習室	自然史資料の保存と整理

月	1 組 (金曜)			2 組 (土曜)		
	日	A	B	日	A	B
1/日	河合・熊・霧谷 自然系博物館	博物館等施設見学 (大阪府下自然系博物館)				
6/金	黒田・山口 博物館実習室	博物館の普及広報と情報化、インターネットアプリケーション	黒田・山口 博物館実習室	黒田・山口 博物館実習室	博物館の普及広報と情報化、インターネットアプリケーション	
13/金	河内 都市遺産セミナー室	刀剣の取り扱いの基礎と方法	河内 都市遺産セミナー室	河内 都市遺産セミナー室	刀剣の取り扱いの基礎と方法	
7	森・山口 琵琶湖博物館	博物館等施設見学 (近郊)				
4限	林 博物館実習室	展覧会企画・ポスター作成	4限	林 博物館実習室	展覧会企画・ポスター作成	
5限	熊 博物館実習室	図録編集・出版	5限	熊 博物館実習室	図録編集・出版	
20/金			21/土			
2/月～ 4/土	森・西本・熊・霧谷 見学場所は6/15、6/16発表	博物館等施設見学 (東京都下宿泊研修2泊3日)				
6/月・ 7/火	高橋・米田・黒田・明尾・西川・河合	なんでも相談会 (希望者のみ)				
14/金	黒田・霧谷 元興寺文化財研究所・奈良市写真美術館・奈良国立博物館	博物館等施設見学 (選択制 6/10と9/14、9/20実施の見学先のうちどれかを選択して参加すること。すべて参加してもよい)				
20/木	森・山口 京都方面美術館見学	博物館等施設見学 (選択制 6/10と9/14、9/20実施の見学先のうちどれかを選択して参加すること。すべて参加してもよい)				
21/金	(休講)		22/土	秋分の日(祝日)		
28/金	熊 都市遺産セミナー室	資料写真撮影の目的と方法	熊 都市遺産セミナー室	熊 都市遺産セミナー室	資料写真撮影の目的と方法	
5/金	米田・明尾 博物館実習室	展示指導及び実習展準備作業 (実習展での資料借用と梱包)	6/土	原田・西川 博物館実習室	展示指導及び実習展準備作業 (実習展での資料借用と梱包)	
12/金	伊 博物館実習室	お茶と文化	13/土	伊 博物館実習室	お茶と文化	
19/金	伊 誠之館3号館和室(茶室)	資料取り扱い・鑑賞 (茶室)	20/土	伊 誠之館3号館和室(茶室)	資料取り扱い・鑑賞 (茶室)	
26/金	黒田・林 博物館実習室	展示指導及び実習展準備作業 (学生による自主作業)	27/土	林・文殊 博物館実習室	展示指導及び実習展準備作業 (学生による自主作業)	
2/金	(休講)	実習展のための自主作業は可能	31/水	(休講)	実習展のための自主作業は可能	
9/金	米田・林 担当者全員(講評)	展示指導及び実習展準備作業 (学生による自主作業)	3/土	文化の日(祝日)		
11/日～ 16/金	黒田・林 勤労感謝の日(祝日)	実習展 (11/11～16)	10/土	森・林 博物館実習室	展示指導及び実習展準備作業 (学生による自主作業)	
23/金	黒田・林 博物館実習室	講評 (11/16)	12月	熊 博物館実習室	撤去 (11/16・17)	
30/金	黒田・林 博物館実習室	文化遺産としての建造物	1/土	熊 博物館実習室	文化遺産としての建造物	

月	1 組 (金曜)		2 組 (土曜)	
	A	B	A	B
	日	博物館等施設見学 (大阪府下 建造物・景観見学) 大阪くらしの今昔館・大阪市内まち歩き	日	
	2/日	橋幸・山口 一瀬 博物館実習室	博物館実習室	見学者動態調査の手法と展示評価
	7/金	一瀬・石立 大阪府立近つ飛鳥博物館	博物館実習室	博物館実習室
12	9/日	博物館等施設見学 (展示評価調査)		
	14/金	伊藤(健) 博物館実習室	伊藤(健) 博物館実習室	金属・木器資料の保存処理
	21/金	明尾 博物館実習室	米田 博物館実習室	博物館運営の現状 (博物館と社会貢献)
	11/金	担当者全員 博物館実習室	(休講) 担当者全員 博物館実習室	1年間の反省・学芸員の課題
1	17/木 締切	1組・2組全員 (提出場所) 博物館事務室	提出期間 1/11～1/17 博物館実習簿及びレポートの提出 (レポート論題)「自由題」 A 4判 横書き 4000字 (原稿用紙・ワープロ作成可)	提出時間 10:00～16:00 (12:30～13:30は除く)
	18/金	(休講)		センター入試 (関係者以外学内立入禁止)
2	13/水	1組・2組全員 (受取場所) 博物館事務室		受取時間 10:00～16:00 (12:30～13:30は除く)

【実習上の諸注意】

- 実習に関する全ての連絡は、インフォメーションシステムの「講義連絡」または「お知らせ」にて行うので、実習のある日の前日には、必ずインフォメーションシステムをチェックすること。  
また、休日の実習・見学等の詳細については、その科担当授業中に指示をすることもあるので注意すること。  
[インフォメーションシステムは、関西大学ホームページ(http://www.kansai-u.ac.jp)のトップページ5下にある「インフォメーションシステム」をクリックして閲覧ください。]
- 実習は時間的に制約される場合が多いので、時間厳守で集合のこと。
- 館内においては、館則を守り、学生としての品位と自覚が必要。また、万年筆・ボールペン等は使用しないこと。鉛筆のみ可能。
- 実習簿は所定の日に必ず提出すること。その際、配付した資料・見学実習等で集めた資料等も実習簿にファイルしておくこと。また、採点後は各自へ返却するので必ず受け取りに来ること。

## 平成24年度博物館実習受講者数表

### 全体

		3年次	4年次	合計
学部	法学部	0	1	1
	文学部	41	2	43
	経済学部	0	0	0
	商学部	0	0	0
	社会学部	8	0	8
	政策創造学部	0	0	0
	外国語学部	0	1	1
	総合情報	0	0	0
	理工系学部	0	0	0
	小計	49	4	54
	大学院			
科目等履修生				0
総合計				54

院・学部・年次別	3年次	4年次	大学院	科目等	合計
1組（金曜日）	33	0	1	0	34
2組（土曜日）	16	4	0	0	20
合計	49	4	1	0	54

男女比	男子	女子	合計
1組（金曜日）	6	28	34
2組（土曜日）	1	19	20



平成24年度博物館実習展集合写真



平成  
24年度

# 関西大学博物館実習展

11月11日(日)～11月16日(金)

開館時間：10時～16時  
 入館料：無料  
 関西大学博物館  
 第2展示室(簡文館内)



関西大学博物館 関西大学千里山キャンパス 阪急千里線関大前駅下車 徒歩10分  
 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 TEL : 06-6368-1171 E-mail : fukubutsukan@mi.kandai.jp

## YADIRU 関西大学博物館実習展



### 制服 - 女子たちの世界 -

みなさんにとって学校の制服とはどんな存在ですか？

制服には、自分自身がどの集団に所属しているかを示す役割があります。しかし、近年では、制服が自分を出すための道具の一つとしても活用されており、その役割が多様化しています。また一方で、制服廃止を訴える声も少なくありません。

このように、時代とともに変わる制服の存在意義を見つめなおすきっかけになれば幸いです。



### 書く - 手書きの大切さ、明日からできること -

近年、めまぐるしく発達する我が国の技術は、私たちの暮らしをより便利に快適に実用してきました。しかし、急速な発達一方で失われる日本古来の文化があります。そのひとつが手書きです。手書きであるからこそ生まれる文字の癖や書式は十人十色。そして丁寧いやすれ、文字の濃淡は二度と同じものを生み出すことはできません。世界に一つしか訪ねない言葉から伝わる感情の起伏や深み、昭和時代の書者の様子や文人、画家そして意匠の手紙等、「言葉の国 日本」ならではの書く魅力を感じていた方も展示をご覧ください。

机には美しい便箋とお気に入りのペン、さあ、大切なあなたに手紙を書いてみませんか？



### 絵本 - 隠された秘密 -

— 私たちが思いがある、思いは思いを受け継がれてきた。 —

読み手に合わせて多様な解釈が図られている現在では、絵本は子供から大人まで幅広い年齢層が楽しめるものとして生活に浸透しています。

今回の展示では、過去から現在に至るまでの絵本を紹介すると同時に、絵本の発行費である制作過程を展示します。普段気にならなっている絵本の魅力や面白さを改めて感じていただければ幸いです。



### 移る時代は鬼ばかり

現代日本のエンターテインメントにおいて、鬼はキャラクターとして重要な存在となりました。しかし、古代まで遡ると、当時の人々と現代の私たちの間に、鬼の認識について異なる部分があることに気が付きます。

中国・東アジアから伝わった思想によって、古代から中世にかけての日本では、鬼は「なにか恐ろしいもの」とされ、恐れられていた。しかし近世に入ってこの認識が薄れていき、現代の様々な現象における話題に繋がります。本展示を通じて、吾時代の人々の鬼に対する認識に触れながら、「現代に鬼は必要なのか？」という問いの答えも、皆様それぞれ見つけていただければ幸いです。



### 時代を巡る陵墓 - 認識の移ろい -

日本最大の古墳である大仙陵古墳をはじめ、日本各地に点在する陵墓。昔人は訪れたことがありますか。整然とした管理が図る陵墓の側には、立ち入ることなどを禁止する注意事項が書かれた高札が掲げられています。しかし、明治時代には日本語で書かれていた高札のほかに、英語で書かれた高札もありました。そこには当時の時代背景が垣間見えています。

本展示では、英文高札を中心とする、近代から現代までの陵墓に対する認識の変化を辿ります。華子塚古墳の発掘調査や石鳥居・古墳古墳群の世界遺産登録推進活動などで、近年さまざまな問題が提起されている陵墓。その背景に迫ります。

## 関西大学博物館

関西大学千里山キャンパス 館文館内  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 TEL: 06-6368-1171  
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html  
E-mail: fukubutokan@nirimi.kansai-u.ac.jp

観覧料 無料 関西大学千里山キャンパス 館文館内「展示室」受付時間 10:00



御来館日 平成24年11月 日

### 関西大学博物館実習展アンケート

本日は、関西大学博物館実習展にお越しいただきまして誠にありがとうございます。今後の実習展の参考にさせていただきますので、よろしければアンケートにご協力をお願い致します。なお、いただいた回答はアンケート集計の目的以外には一切使用いたしませんので、率直なご意見、ご感想をお聞かせください。

#### 【お答えについて】

1. 性別	<input type="checkbox"/> 男性 <input type="checkbox"/> 女性
2. 年齢	<input type="checkbox"/> 10代未満 <input type="checkbox"/> 20代 <input type="checkbox"/> 30代 <input type="checkbox"/> 40代 <input type="checkbox"/> 50代 <input type="checkbox"/> 60代 <input type="checkbox"/> 70代 <input type="checkbox"/> 80代以上
3. 所属	<input type="checkbox"/> 一般 <input type="checkbox"/> 本学学生・院生( )学部 <input type="checkbox"/> 本学職員・関係者 <input type="checkbox"/> 本学以外の学生 <input type="checkbox"/> 小学生 <input type="checkbox"/> 中学生 <input type="checkbox"/> 高校生 <input type="checkbox"/> その他( )
4. 住所	<input type="checkbox"/> 大阪府・・・( <input type="checkbox"/> 吹田市 <input type="checkbox"/> それ以外の市町村 ) <input type="checkbox"/> 京都市府 <input type="checkbox"/> 兵庫県 <input type="checkbox"/> 滋賀県 <input type="checkbox"/> 奈良県 <input type="checkbox"/> 和歌山県 <input type="checkbox"/> その他( )
5. 今回の実習展を何でお知りになりましたか。	<input type="checkbox"/> 授業 <input type="checkbox"/> ポスター <input type="checkbox"/> 関西大学ホームページ <input type="checkbox"/> 友人・知人 <input type="checkbox"/> 本学職員・関係者 <input type="checkbox"/> その他( )
6. これまで関西大学博物館実習展にお越しになられたことはありますか。	<input type="checkbox"/> 初めて <input type="checkbox"/> 2～4回 <input type="checkbox"/> 5回以上 <input type="checkbox"/> 毎年
7. 書展、博物館や美術館にどのくらいの頻度で足を運ばれますか。	<input type="checkbox"/> 週に1回 <input type="checkbox"/> 月に1回程度 <input type="checkbox"/> 半年に1回程度 <input type="checkbox"/> 1年に1回程度 <input type="checkbox"/> その他( )

#### 【展示について】

( 5 : とても良かった 4 : 良かった 3 : 普通 2 : あまり良くなかった 1 : 良くなかった )

#### 《制服 ～女子たちの世界～》の展示をご覧になって

1. 展示の内容について ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
2. 展示の見やすさについて ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
3. 展示の解説について ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
4. 印象に残った展示品は何ですか。

5. 制限制度はこれからも存続するか、廃止になるかあなたはどう思いますか？

( )

#### 《書く 手書きの大切さ 明日からできること》の展示をご覧になって

1. 展示の内容について ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
2. 展示の見やすさについて ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
3. 展示の解説について ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
4. 印象に残った展示品は何ですか。

5. 展示を見て、手紙を書きたいと思いましたか？理由や感想等をご自由にお書きください。

( )

(裏面へ続きます)

### 平成24年度博物館実習展アンケート

( 5 : とても良かった 4 : 良かった 3 : 普通 2 : あまり良くなかった 1 : 良くなかった )

#### 《絵本 ～開かれた秘密～》の展示をご覧になって

1. 展示の内容について ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
2. 展示の見やすさについて ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
3. 展示の解説について ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
4. 印象に残った展示品は何ですか。

5. 絵本を読む人と作る人の2つの立場からの展示でしたが、これまでの絵本に対するイメージから何か変化したことがあればお書きください。

( )

#### 《移る時代は鬼ばかり》の展示をご覧になって

1. 展示の内容について ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
2. 展示の見やすさについて ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
3. 展示の解説について ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
4. 印象に残った展示品は何ですか。

5. 展示をご覧になって、鬼の認識やイメージについてどう思われましたか？

( )

#### 《時代をめぐる陵墓 ～探検の移ろい～》をご覧になって

1. 展示の内容について ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
2. 展示の見やすさについて ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
3. 展示の解説について ( 5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1 )
4. 印象に残った展示品は何ですか。

5. 陵墓は今後どのようにあることが望ましいと思われましたか？

( )

#### 【全体の展示について】

- I. 実習展全体の雰囲気などはいかがでしたか？
- II. 今回の展示についてご意見・ご感想などがあればお書きください。

以上でアンケートは終了となります。ご協力ありがとうございました。



# 平成24年度博物館実習展アンケート結果に関する報告

平成24年度関西大学博物館実習展では、博物館実習履修者により「制服」「書く」「絵本」「鬼」「陵墓」の5つのテーマについての展示が行われた。本調査は各展示及び本実習展全体の評価について分析、検討することを目的とする。

## 調査方法

平成24年度関西大学博物館実習展の来館者を対象に、会場である関西大学博物館第2展示室において、2012年11月11日から同年11月16日までの6日間行った。

用紙の配布、回収は展示室入口で行った。配布時、来館者へはアンケートへの回答は任意であることを伝えたと上で用紙と鉛筆を手渡し、展示室内での回答を求めた。

## 【来館者の構成について】

総来館者465人のうち、回答者は204名であった(図1)。

来館者数には授業の一環として訪れた関西

大学の学生を含むものとした。12日(月)、16日(金)は授業で訪れた学生が集中したため、来館者の割合も高くなっている。

性別の内訳は、男性92名、女性110名、不明2名であった。また、年齢について選択肢を「10代未満」「20代」「30代」「40代」「50代」「60代」「70代」「80代以上」として調査したところ、半数を20代が占めた。(図2)

回答者の所属について選択肢を「一般」「本

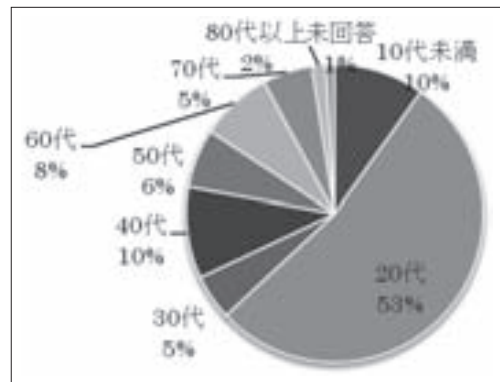


図2：回答者の年代別内訳 (204名)

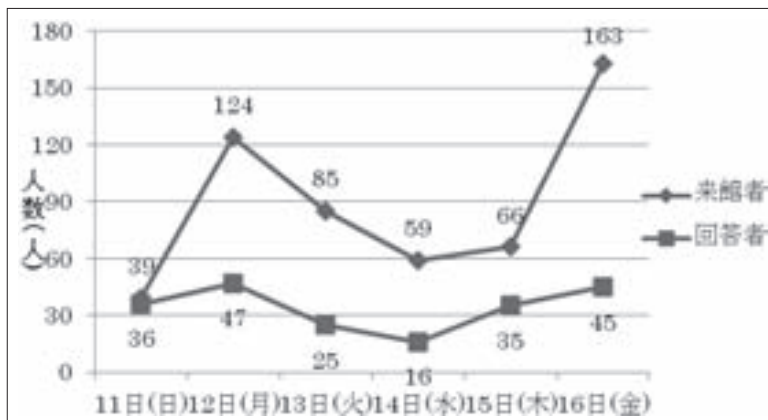


図1：来館者数及び回答者数の推移

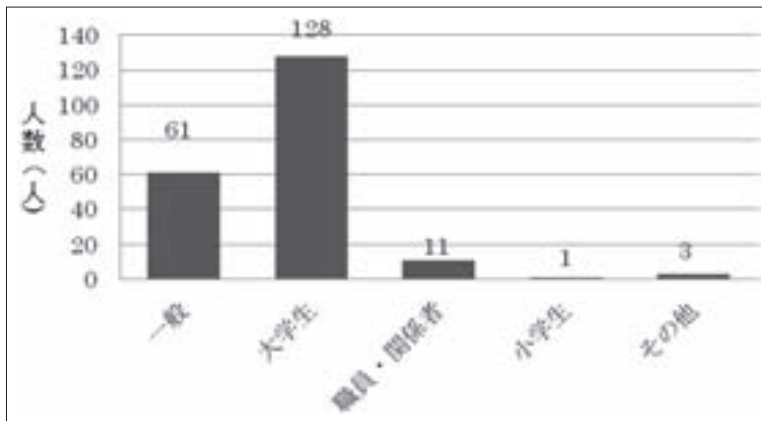


図3：回答者の所属別内訳（204名）

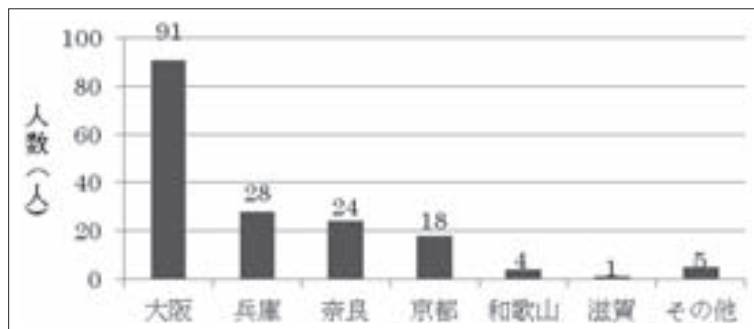


図4：回答者の住所別の内訳（171名）

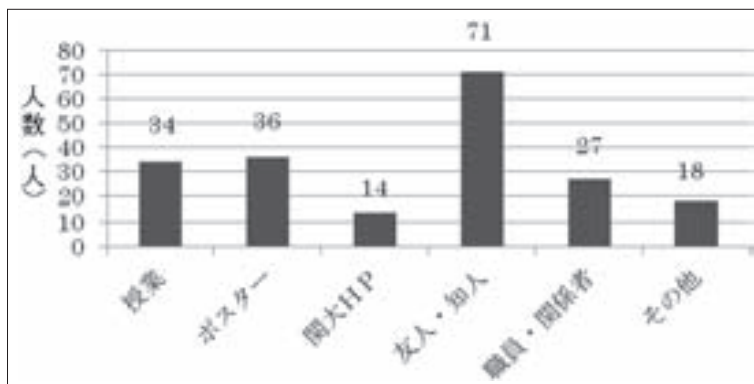


図5：認知別の内訳（200名）

学学生・院生」「本学職員・関係者」「本学以外の学生」「小学生」「中学生」「高校生」「その他」として調査したところ、大学生が全体

の63%を占めた。(図3)。なお、そのうち91%が関西大学の学生であった。

学部については34名の回答があり、内訳は「文

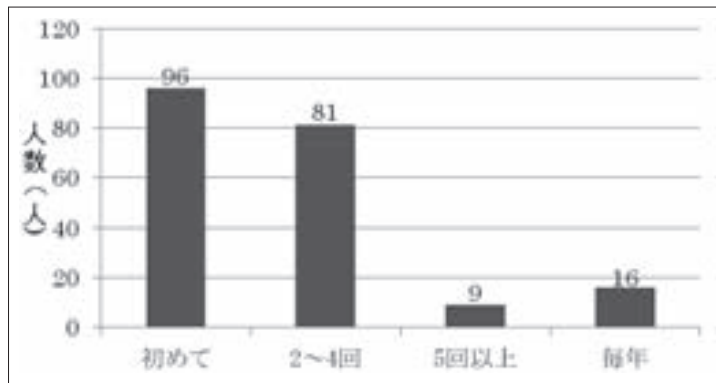


図6：来館回数別の内訳（202名）

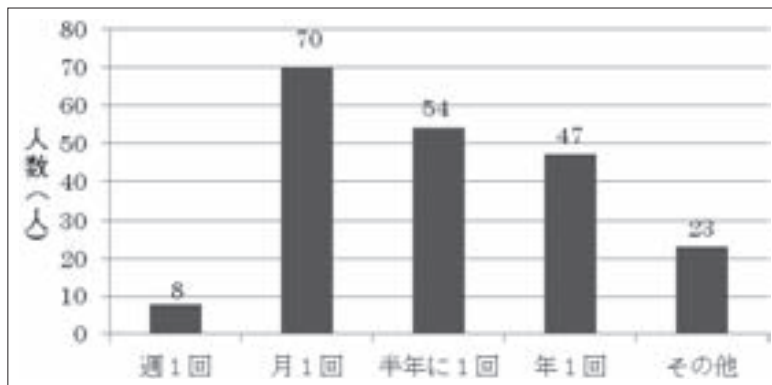


図7：博物館等の利用頻度別の内訳（202名）

学部」25名、「社会学部」4名、「法学部」3名、「政策創造学部」「大学院東アジア研究科」が各1名ずつであった。

続いて居住地域は、全体の53%を大阪からの来館者が占め、うち44%が吹田市からの来館者であった。（図4）

今実習展をどのように知ったかは、友人・知人が全体の35%と最も多い結果となった。また、その他では「関西文化の日のチラシ」や「子供から」などの回答が見られた。（図5）

来館回数は、初めて実習展を訪れたという回答が最も多かった。（図6）

また、博物館・美術館等の利用頻度については、月1回という回答が最も多く見られた。その他では、「めったに行かない」や「イベ

ントがあれば」などの回答が見受けられた。（図7）

### 考察

昨年同様、実習展を友人・知人を通して知ったという割合が高く、他の手段での広報活動の影響力が少なかったということが言える。中でも、関大HPでの広報はほとんど機能していないと考えられるため、来年度以降のHPを使っでの広報には工夫が必要であるとされる。また、その他に分類されたものの中には、「関西文化の日のチラシ等で知った」という回答が、いくつか見受けられた。このような結果を基に、学内だけではなく、積極的に学外への広報活動にも力をいれてい

くべきであると考えられる。

アンケートについては昨年同様に5段階評価の形をとったが、回答の中には、記入の仕方がわからなかったと思われるものがいくつか見受けられた。アンケート作成時に、記入例を載せるなどの工夫をこらすべきであった。また、今年度はクリップボードには挟まず、直接来館者に用紙とペンを渡すという方法を行ったが、全体の意見として、「クリップボードが欲しかった」という回答が数例あったので、もう少し回答者への配慮を考えるべきであった。「考えをお書き下さい」などの質問には、比較的回答が少なかつたことなどから、アンケート作成時には、1人でも多くの方に回答していただける様に、質問文や質問内容をよく吟味する必要があると感じた。  
(池田なみほ)

## 【全体の展示について】

### I. 実習展全体の雰囲気

- いい感じだった。
- いつでも説明して下さる方がいて、より詳しく知ることができて良かったです。
- おちついた雰囲気、ゆっくりと見ることが出来ました。
- ごあいさつやポスターのデザインがすごく凝っていて驚いた。
- コンパクトにまとまっていて見やすく、説明も丁寧にして頂きました。
- しずかで良かった。
- しっかり説明していただいてわかりやすかったです。
- それぞれのテーマと展示内容が一致しないものが多かったと感じました。
- それぞれの展示に個性があり学生の取り組みや思いがしっかり伝わった。
- それぞれの展示のコンセプトがしっかり伝わっていて良かったと思う。
- それぞれの班の人たちが仲良さそうで良かった。
- たくさん親切に話しかけて下さる方と、話しかけにくい方の差が激しかったです。
- テーマがおもしろい、女性がいっぱい居てすばらしい。
- テーマが興味深いものばかりでした。
- どこに何があるのか分かりやすかつたし、学生さんらも親切だったので見やすかつたので、来て良かった。
- とても見やすい、良い雰囲気。
- とても静かで良いところでしたが、少し質問し辛かつたです。
- とても落ち着いた物静かな雰囲気だったので、じっくりと展示を楽しむことができた。
- とても良かった。
- どのグループがどこに展示しているのか、ぱっと見ても分かりやすかつたです。時間をかけて丁寧に作ったということが伝わってきた。
- なんかポップなものはない。でも、落ち着いているのもいいかも。
- はじめてこちらに来ましたが、とても良かったと思います。
- ポスターのデザインがいい。
- ゆっくり見学できました。
- ゆったりしていたが、周囲の人の視線が気になる。
- よい雰囲気でした。
- よかつたです。
- レトロな感じで落ち着きました。
- 案内してくれるのはいいのですが、こちらの上承なしで解説を始められるのでゆっくり展示を見られなかつたです。
- 穏やかな雰囲気。もう少しスタッフさんの解説があつても良かったかなと思います。曜日によって感じが違うなあと感じました。
- 各展にガイドがいて、質問できる環境だつた。

たので良かった。

- 学芸員がよく解説してくれて(特に陵墓、鬼、絵本) わかりやすかった。
- 学生がそれぞれ頑張っていて、楽しんで展示を作っているのが感じられて良いと思った。
- 学生さんが一生懸命説明してくださったのが良かったです。
- 学生とはいえ、本格的でよかったです。
- 学生の私語が多く、来館者が来ても解説しない。
- 学生の方たちだけであれだけ調べて、まとめることがすごいなと思いました。
- 学生はよく頑張っている。
- 関大の人と話せたのが一番の印象です。一人でゆっくり見るのもいいですが、こういうのも思い出になりますね。
- 関大の博物館は土器や銅器などの堅苦しいイメージしかなかったが、今回の実習展は絵本や制服など興味を持ちやすいものをテーマとしていて、私の中で関大博物館のイメージが大きくプラスになった。
- 貴重な資料が多くあり、静かで落ち着いた雰囲気良かった。
- 去年よりも話しかけてくださる方が多く、内容をしっかり理解できたと思います。
- 興味深いものや馴染みのあるものについて、楽しく知ることが出来ました。
- 凝られているものが多く、楽しかった。
- 見やすい雰囲気でした。
- 見やすく、巡りやすく良かったです。
- 見やすく良かったが、時折順路に迷うことがあった。
- 見学しやすい。
- 現代のものと古くからのものが分野は違うけど一同に見られたので面白かった。
- 古いものから今に至るまでジャンルが広くあり、あきなかった。
- 最終日のせいか、にぎやかでした。
- 昨年とはまた違ってここがすごくいい味を出していたと思いました。
- 昨年実習展をりましたが、昨年と比べ、全体的に本・紙が多いという印象。
- 実習生の雰囲気など展示の仕方など、とても明るく、見やすくよかったです。
- 初めて来ましたが、良かったです。
- 色んなものに出会えて楽しめました。
- 色々なジャンルの展示がみられて面白かった。
- 色々なテーマであまることなく見られました。
- 色々な種類の展示品があり、現代の物だけでなく、過去の物と比較しておいてあり、とても良かった。
- 真ん中のソファが意外に便利だった。
- 親しみを持てるし、そんなにしんどくならなかったので面白かったです。
- 人が多くてゆっくりとみることができなかった。
- 静かすぎず、見やすい雰囲気でした。
- 静かで良かった。
- 静かに見なければいけないという堅苦しさがなく、たのしく見れました。
- 積極的に説明してくださる学生さんもいらっしやって、わかりやすかったです。
- 説明もわかりやすかった。
- 説明をいただいてありがたかったです。
- 全く異なる展示が同じ場所にあったのが新鮮でした。
- 全体的におとなしい雰囲気だった。
- 全体的にきれいにまとめられていた。
- 全体的にパネルが凝っていてきれいで見やすかったです。
- 全体的にレベルが高く興味深い内容だった。
- 全体的に良かったです。
- 大学らしい展示物が多く面白かった。
- 大変よく思考されて、企画されている。

- 大変素晴らしい。
- 中央の丸いイスがよかった。
- 丁寧な対応が良かったと思います。
- 丁寧に展示されている印象を受けました。
- 程よい静かさが良かった。
- 展示がきれいで、とてもレベルが高いと思いました。
- 展示に学生がついていていい感じでした。
- 展示の解説の文字がやや小さく、見にくいものがあった。
- 展示は分かりやすくよかった。
- 展示を見ていると、解説をしに来て下さって親切でした。
- 展示品が見やすいように工夫されていると感じた。
- 動線がわかりにくかった。
- 内容が濃く、集中することができた。
- 非常に落ち着いた。
- 普通。
- 雰囲気はよかった。
- 本格的なもので、皆さんの取り組みに感心しました。
- 明るさもバランス良く、いい雰囲気だったと思います。
- 予想以上に楽しかった。説明が詳しく、分かりやすかった。
- 落ち着いた雰囲気の説明をしてくださり良かったです。
- 良かったです。
- 力がこもっていることが分かった。
- 和やかで良かった。
- アンケートを書くときに、何かボードのようなものがあれば見ながら評価しやすかったんじゃないかと。
- いろんな展示だったので、ちょっとどれも浅い感じでしたが、関大生の説明等が入ったので、楽しく見られて、勉強になりました。
- おもしろかったです。
- キャプションの背景が色々あり、鮮やかでした。テーマも興味のあるものばかりで面白かったです。
- グラフィックはきれいになっています。展示物を展示物なりに飾っているだけという印象が全体に強いので、もう少し掘り下げた解説が入ってもよいかと思います。スペースの都合もありますが。
- このような展示はぜひ継続してもらいたいと思う。
- すごく勉強させていただきました。
- スタンプとか自分の手で触れる作品があっておもしろかったです。
- スペースの都合上仕方ないと思いますが、もっと深く掘り下げてくれたら、もっと楽しかったと思います。
- せまい部屋の中にブースごとにわかりやすく展示がしてあって、とてもおもしろかったです。それぞれ一生懸命準備をして来館者を喜ばせようとしているのが伝わりました。
- それぞれのテーマにおいてよく研究されていると思った。展示品がもう少し多くても良かったかなと思うテーマもあった。ありがとうございました。
- テーマが多すぎる。そして、展示物の数は少なすぎる。
- 友人を連れてまた来たい。
- テーマと展示物が相違しない様、色々と考えて展示できる様に考えられている。説明

## II. 今回の展示についての意見・感想

- 2班合同という発想はなかった。
- アンケートのつくりが若干適当な印象。選択肢が網羅的でないところがあったりした。
- アンケートをかくための机がもっとあるといいと思う。

してもらったタイミングも良かった。

- テーマについてどの班もわかりやすくまとめられていて、とても良かったと思う。
- とても丁寧な説明をして頂き、よくわかりました。
- どのテーマも興味深かった。結論のパネルがあれば良かったかなと思う。
- どの展示も興味深くてためになりました。今後自分でもそのテーマについて調べてみたいと思いました。
- どの展示も説明も丁寧に工夫して展示がされていると思いました。声をかけたら丁寧に説明して下さい良かったです。
- どの班も図録が置いておらず、見る事が出来なかったのが残念でした。
- どれも興味があったので良かったです。
- はんこがあったのはおもしろいが、画板がほしい。
- みなさんが大変よく考えられ、工夫されていることが伝わってくる展示ばかりでした。これからも頑張ってください。
- もう少し展示期間があってもいいのかなと。多くの方が来られていて、にぎわっていたと感じた。
- よいものを見させて頂きありがとうございました。
- 一つ一つの展示が細かなところまで調べられていて、とても興味を喚起されました。スタッフの方の気配りや解説も丁寧だったと思います。
- 解説があまりなかったのと私語が多いのが気になった。
- 解説の字をもう少し大きくしてほしい。
- 解説の文章の語尾は統一したほうがいいと思います。
- 絵本班のハンズオンが良かった。
- 絵本班の入り口が、分かりにくかった。鬼班はさっぱりしていて見やすかったですが、

どうしても展示品が少ない感じがしました。

- 各コーナーの共通点から合同発表も面白いかも。準備と制作大変だったと思います。ご苦労様でした。
- 学生さんの努力の成果が伝わってきました。取り組むテーマによって各々がった苦労があったと思います。お疲れ様でした。有難うございます。
- 楽しい説明でした。
- 楽しかったです。頑張ってください。
- 楽しかったのでまた催して下さい。
- 気持ちの良い対応で、説明も良かったです。
- 貴重な展示物を見せて頂くことが出来てよい体験になりました。
- 狭いペースでよく頑張って作られたと思います。
- 興味のある内容が多かったので良かった。
- 今まで知らなかったことがたくさん知れてよかったです。勉強になりました。
- 自分が取り組んだときは必死で、周りが見えませんでした。客観的に見ると「ああしたら」「こうしたら」と思うものです。たくさんの方が図書館にあるのだなあと感じました。
- 手紙等、裏があるものは裏も見たい。
- 受付嬢の対応がさわやか。
- 親切に色々説明して頂き、ありがとうございました。
- 身近なものに関する展示が多かったなと思った。
- 図録の簡略版のようなものがあれば、いただきたかったです。楽しい展示でした。
- 昔のものを上手に取り上げ分かりやすく展示されていてよかったです。
- 昔の手紙や絵本等、色々なところで、収集されたと思います。準備が大変だったと思います。良い展示を見せていただいてありがとうございました。

- 全体に苦心のあとがみうけられました。
- 全体的にパネルとかの説明が少ないように感じました。でも見ていて面白かったです。
- 全体的に文字が小さい、結論になるパネルがあれば良いかなと思う。
- 素晴らしい展示でした。ただ、私も友人に言われて初めて知ったので広報をもう少し工夫できたら、と思います。アンケートの量が少し多いかな。
- 天目が見れて良かった。
- 展示ケースがもっとあれば、より詳しく紹介できる部分もあったんじゃないかなと思った。非常におもしろかった。
- 展示スペースをもう少し広くしてはどうでしょう？
- 展示を見ていたら、班員の方々が丁寧に説明して下さって、とても分かりやすかったです。手紙や制服など、身近なテーマのものも多くて非常に楽しめました。
- 展示者の話が分かりやすかった。
- 展示品の近くに立っていただけると、話も聞きやすく気軽に質問できるので良かったです。
- 展示物一つ一つの解説が少しでもあればなお興味を持てるものになると思いました。
- 勉強になりました。
- 本物をどこからか借りてきているものもたくさんあり、本格的だと思いました。もう少しゆっくり見たかった。グループによって資料やプレゼンがあって嬉しかったです。
- 毎年やっているみたいなので、また来年、再来年来てみたいです。
- 友人自分の知らないことをたくさん知れましたし、実際に触れることも出来たのでとても良かったです。
- 陵墓班の子の解説が分かりやすくて、興味がでてきた。自分の研究にも関することも考えさせられた。

## 考 察

### I. 実習展全体の雰囲気について

昨年同様、落ち着いた雰囲気が高評価を得た。また、「学生の説明がよかった」や「よく頑張っていた」、「どのテーマも興味深かった」など、実習展の取り組みに対する姿勢も高く評価していただけた。しかし一方では、「学生の私語が多かった」や「解説がない」など、受講生間での実習展の取り組みに温度差が見られるような意見もあったため、受講生間の意識統一が必要であると思われる。

### II. 今回展示についての意見・感想

「楽しかったです」や「良かったです」などの意見が多く見られ、全体的に高評価を得たものと思われる。しかし、「図録がなかった」の意見があるように、初歩的な部分での来館者に対する気配りができていなかったと感じられる。さらに、「テーマが多すぎる」や「もっと深く掘り下げるべき」、パネルに対する指摘などの意見も一部で見られ、準備期間からテーマや展示方法を熟考しなければならないと感じた。

(池田なみほ)



## 制服～女子たちの世界～

### 要 約

展示の内容、見やすさ、解説については、どの項目も4の良かったという評価が多い。4、5という高い評価が多いのは非常に嬉しいことだ。一方で、少数だが、1や2もいるのが残念であった。また、印象に残った展示物では、「年表」と「実物の制服の展示」が大半を占めていた。

### 方 法

全体での共通項目として「内容」「見やすさ」「解説」について、5段階での評価を求め、「印象に残った展示物」については記述方式での回答を求めた。また、制服班の班別質問として「制服制度はこれからも存続するか、廃止するかあなたはどのように思いますか？」という設問を設け、自由記述での回答を求めた。

### 結 果

#### 1. 共通項目の結果

1. 展示内容について 2. 展示の見やすさについて 3. 展示の解説について  
5：とても良かった 4：良かった 3：普通 2：あまり良くなかった 1：良くなかった

#### 2票以上の印象に残った展示物

【2票】 プレザー、平安女学院の当時の写真、ネクタイ、リボンなど、新聞記事、明治～大正あたりの写真

【3票】 モンペ、生徒手帳

【4票】 セブentyーン、男袴の写真

#### 班別項目について

『制服制度はこれからも存続するか、廃止になるかあなたはどのように思いますか？』

(回答者：153名) 【存続すべき】126名 【廃

表1. 共通項目の回答結果

質問 \ 点数	5	4	3	2	1	合計
1. 内容	55人	91人	33人	9人	0人	188人
2. 見やすさ	61人	88人	36人	3人	0人	188人
3. 解説	48人	89人	55人	13人	1人	205人

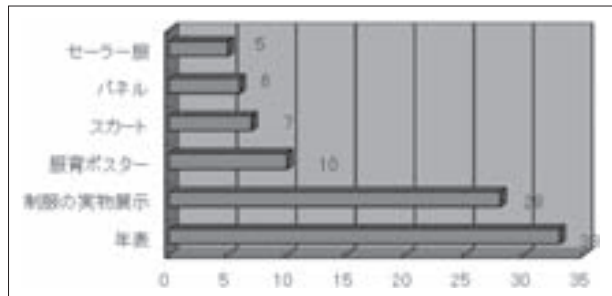


図1. 印象に残った展示物 (回答者125名)

止】9名【その他】13名

- いくつかは廃止になると思いますが、私は制服があってほしい！
- 制服は身分証明の一つだからこれからもわずかながら残っていくと思う。
- 子供がいる限り存続する。
- 存続すると思う。制服の人気も根強いから。
- TPOの勉強になるので存続した方が良い。
- 母校が私服校から来年制服になるので存続すると思う。
- 象徴でありステータスとしても自覚としても必要だと思います。
- 女子として制服がなくなるのは寂しい。
- 私服になったらなったで毎日の服を考えたりするのがいやな人やお金がない人もいますので存続すると思います。
- 廃止になるように思いますが、個人的にはずっと存続して欲しいと思います。
- 存続して欲しい。学校のアイデンティティだとも思うから。
- 制服は学校のステータス。毎日大学生にな

って服決めるのが面倒だ。

- 制服⇔私服をいったりきたりするのではないのでしょうか…（今は制服→私服の流れですが）。
- 一応、制服はあっても個人の自由にさせてもらえるのではないか？
- 需要がある。
- 廃止する理由がない。
- 学校のイメージとして存続する。
- 規則の1つであるから。
- 制服も1つのファッションになっているから。
- 歴史と伝統を受け止める方々も多いと思うから。
- 制服を好む人が多い。
- 廃止すべき。
- 学校によりけり。
- 廃止して自由化する教育機関があってもいいと思うが、一方で存続する機関も存在すべきだと考える。
- わからない。
- どちらでもいい。
- 自由にセンスを生かす個性。
- 学校の制服は減っていくかもしれないが、社会全体の制服はなくならないと思う。
- 続いて欲しくもあるけれど、少し自由になっても欲しい。
- 学生であることを示すために存続すべき。
- 歴史的意義は失われても、ファッションのひとつとして。
- 所属を示す重要なものであるため。
- 秩序やルールを守るという教育目的で残ると思う。
- 近年海外で制服もどきが流行していると思うので、逆輸入などで無くならないと思う。
- 毎日違う制服を着るのは面倒だと思うので、存続すると思う。
- 一つの文化と成っている。

- 学校の校風を示す意味でも、存続する学校があってもいいと思います。
- この展示は制服制度の存続・廃止について問いかけるものだったのですか？
- 特に女子校では、その制服を着たいために入学するひともいる。
- ドレスコードを教えるために必要だと考える。
- 日本らしさだと思うので存続すべき。
- かわいいから続けて欲しい。
- 制服を着られるのは学生の数年のうちだけだし、毎日制服の方が楽でいいと思う。
- 制服は中高生のアイデンティティだと思うので、まだまだ必要とされると思います。
- 制服は学生のあこがれ。
- 制服で学校を決めるような子も多いので、学校の経営的にも続けたいと思います。
- 制服があることで、学校という枠組みに入ることを表し、かつ規律を守る具体的な存在に思えるから。
- ある程度存続する。
- 中高生の冠婚葬祭に使えるきちんとした服なので、TPOを学ぶために必要だと思います。
- 廃止に向かい、制服がファッションになると思う。
- なしでもよいのでは？本人の自由意志に任せてもいいのではとも思う。
- 学校によってあるところとないところがあるので自由でいいと思う。
- 制服廃止派の意見も一理ありますが、これまで続けてきた制服がなくなってしまうのは淋しい気もします。
- 企業との関係が続く限り、存続すると思います。
- 人々の好みによってこれからも存続すると思います。
- 良いデザインの制服は生徒を呼ぶし、私服

に比べて服装のチェックが楽であったり、メリットがあるので存続すると思う。

- 学生らしさを大切にするため制服制度は存続してほしい。
- 無くならないと思う。
- 定義は変わるかもしれませんが、「制服」という存在は残ると思います。
- 存続する、特に田舎。
- 学生の特権、存続してほしいです。
- 存続すべき、制服は社会人であればスーツと同じで、立場を象徴するものと考えているから。
- 廃止になることはないでしょう。
- 私の通っていた付近の高校は制服がなかったので、廃止に向かっていくのではないかと思います。ただ、制服があるほうが毎日の着替えはラクです。
- 生徒や学校内の秩序のため存続したほうがいいと思うが、時代の流れを見ると廃止になると思う。
- 人それぞれの個性が尊重されるようになり、廃止になると思う。
- 一つの文化になっているが校則違反とのかねあいが難しいかも。
- 私立はともかく、公立は廃止…というか自由化していくように思います。

## 考 察

印象に残った展示物として「実物の制服」と「年表のパネル」が多く挙げられた。私たち制服班が努力した部分なので良かったと思われる。しかし、後半部分の現物展示は現代の展示品ばかりで物足りない感じであり、見つからなかったとはいえ、昔の展示品を集めることが出来ればよかった。

班別項目の質問では、大半の方が「制服は存続すべきだ」という答えだった。しかし、回答の中に『この展示は制服制度の存続・廃

止について問いかけるものだったのですか?』という回答があった。存在意義を見つめ直すということであり、そのつもりで展示をした訳ではなかったもので、痛いところを突かれたと感じた。もう少し焦点を当て、質問をするべきであったかと思われた。(寺坂奈緒)

## 書く～手書きの大切さ、明日からできること～

### 要約

展示の内容、見やすさ、解説について尋ねたところ、いずれも男性より女性の方が評価が高かった。男女とも内容、見やすさに比べて解説の評価が低い傾向にあった。

また、印象に残った作品について太平洋戦争中の関大生の軍事郵便を挙げている意見が数多くみられたが、来館者の多くを関大生が占めていたこともあって多くの人の関心を得たようだ。

### 方法

全体での共通項目として「1、内容」「2、見やすさ」「3、解説」について5段階での評価を求めたほか、各班ごとに「4、印象に残った展示品」を挙げてもらった。

また、班別の質問項目では「5、展示を見て、手紙を書きたいと思いませんか？理由や感想等をご自由にお書きください。」という設問を設定し、来館者に意見を求めた。

### 結果

#### (1) 共通質問項目について

1. 展示の内容について 2. 展示の見やすさについて 3. 展示の解説について  
5：とても良かった 4：良かった 3：普通 2：あまり良くなかった 1：良くなかった

#### (2) 班別項目について

図2は、印象に残った展示品の割合を示したものである。谷崎潤一郎や今東光など、有名な作家の書簡が最も印象に残ったとする回答が約半数を占めていたほか、太平洋戦争中の関大生の軍事郵便を挙げている意見も数多くみられた。軍事郵便については、手紙の内

表1 合計人数と平均値

質問	点数					合計	平均
	5	4	3	2	1		
1. 内容	66人	88人	24人	2人	0人	180人	4.21
2. 見やすさ	61人	77人	35人	5人	1人	179人	4.07
3. 解説	55人	70人	47人	7人	0人	179人	3.97

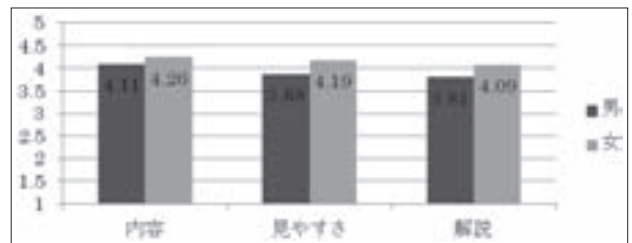


図1 性別ごとの評価の平均値（男性80名、女性99名）

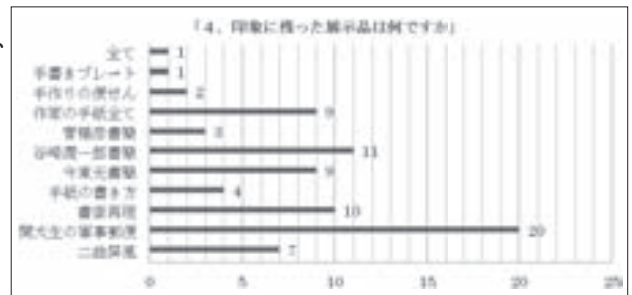


図2 印象に残った展示品割合（回答数71名）

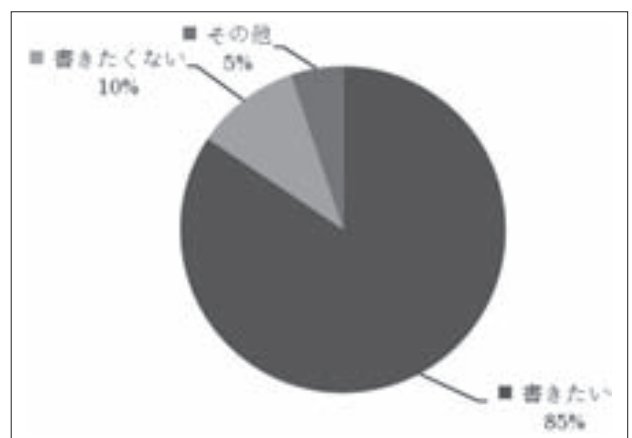


図3 班別項目の回答結果

容に加え、デジタル文字との比較が印象的だったという意見もみられた。

図3は、展示を見て手紙を書きたいと思っ

たかどうかの割合を示したものである。8割以上の回答者が手紙を書きたいと答えた。また、合わせてその理由と展示の感想を自由記述式で求めたため、理由については「書きたい」「書きたくない」に分類し、内容の重複したものを省き、全て以下に示した。なお全体の回答数は77であった。

#### 「書きたい」と答えた人数 65名

- 今は手紙を書くことが少なくなってきたので毛筆で書きたいと思う。
- 手紙、ハガキはいつでも好きな時間によんでもらえるから好きな紙に書いて送りたいです。
- いつもメールばかりだけど、たまには手紙も良いなと思いました。
- 年に2～3回は手紙を書こうと思いました。
- 文字の温かみ等はやはり手書きであるからこそ伝わるものだと思うので書きたいと思った。
- 今すぐではないが、先輩方の卒業の際には是非書きたいと思った。
- 自分の手紙の書き方が間違っていることに気付いた。これからは正しく書こうと思う。
- 個人的に書道が好きなので、手紙をかきたいと思った。
- 記念日や母の日などに書きたいと思います。
- 時々手紙を書いているので自分の字で想いを伝えるのもやっぱり大事だなと思いました。
- 様々な工夫がなされていて惹きつけられました。
- 字を習ってから、手紙を書きたいと思った。
- パソコンで打ったものでも、なるべく手書きの言葉を添えたいと思った。
- 今現在文通友だちがいるので、身近に感じた。
- ポストを覗いた時に、手紙が入っていた時の喜びを思い出した。
- メール文末に絵文字をつけるという話しがるほどと思い、おもしろかった。
- 手書きだと時間がかかるので、余計相手のことを思いながら書ける。
- 手紙は字に味わいも出て、たまには手紙を送るのもいいかと思いました。
- 事務的な手紙は書くことが多いのですが、個人的なやりとりはあまりしないのでたまには書こうかなと…。
- おばあちゃんにメールじゃなく、手紙を書いて送ったら喜んでくれるかもしれないと思いました。
- とても心あたまる展示で、感動しました。手紙を書いてみたいと思いました。
- お礼状のような気持ちを伝えるべきものは手書きではないといけないと強く感じた。
- 字で伝わる事もたくさんありますし、何より展示されている物のようにあとに残る手紙のほうが良いと思った。
- 人が自らの手で書いたものだからこそ伝わるものを今後も大事にしていきたいと思いました。
- 近年、自筆の手紙をいただく事は減りました。でも、もらうとやはりうれしいので、自分もなるべく手書きのものを出したいと思いました。
- 日本の四季を感じながら書いてみたいと感じた。
- きれいな字で頂く手紙、うれしいものです。メールよりは心が感じられます。
- メールだけでは伝わりにくい感じがあるので、文通や手紙のやり取りなど久しぶりにしたいなと思いました。
- 誰かに思いを込めた文を書きたいとき年賀状で一言は手書きですね。
- 手紙は電子メールと違い書き手の思いが伝わってきて良いと思いました。

- 手書きの文字には人柄も人のあたたかみもあらわれていると思う。手紙を書きたいと思った。
- とても書きたくなりました。手紙ならではの良さが分かる展示だったと思います。

#### 「書きたくない」と答えた人数 8名

- 昔はよく書いていましたが近頃はメールですね。
- 手紙はどうしてもその人の感情や個性が出るので、あまり悟られたくない。
- 手書きの趣は好きですが、字がへたなのでパソコンにたよってしまう。
- 展示は面白いとは思いましたが、手紙を書きたくはなりません。目的と展示の内容が少しずれているように感じました。

#### その他、展示の感想 4名

- わからない。
- 手紙を書く機会は少なくなり、文字自体も書くことが少ないので意識を変えないとペンを持つこと自体ふえないと思います。
- 手紙は時々書きます。
- 手紙、なかなか書きませんね…。
- 展示品の前でずっと喋っていて展示品が見られない。

#### 考 察

共通項目「内容」については男女とも高い評価だが、「見やすさ」「解説」は少し評価が低かった。(表1) 班別項目の自由記述の中にも“テーマはよいが、展示の内容とのズレを感じる”や“展示ケースの前でしゃべっていた”などの意見がみられたように、来館者に展示の意図を伝える点においては展示内容の構成、展示期間中のインタープリテーションに不十分な点があったと感じた。

この展示を企画したのは、近年パソコンや

スマートフォンの発達によって薄れてきた、手書きで相手に想いを伝えることの大切さについて展示を見に来る人たちに考えてもらいたかったからである。班別項目で展示を見て手紙を書こうと思ったかどうかを尋ねた結果、8割以上もの来館者が手紙を書いてみようと思ったと回答していたので、展示の意図はおおむね伝わっていたのだと思う。しかし、手紙の内容を重視するため、あえて手紙の作者の詳細を記さなかったことで来館者の興味に向かなかったという問題点もあったように、展示を作っている私達と来館者の間に認識のズレが生じることもあるので、客観的に展示を見つめなおす機会も必要だったように感じた。また、手書きの大切さをより強く伝えるためにはデジタル文字との比較展示を増やすなど、もっとわかりやすい伝え方があったように思う。このようなテーマを選んだからこそ、もっと積極的に来館者に話しかけたり、人の心に強く訴えかけるように展示の内容や解説を工夫できていたら展示はよりよいものになったのではないかと感じた。(川向志穂)

## 絵本～隠された秘密～

### 要約

展示内容、見やすさ、解説について尋ねたところ、いずれも男性より女性の方が若干評価が高く、全体的には内容や見やすさより、解説の評価が低い傾向が見られた。

最後に二つある班別の自由記述においては、しかけ絵本の巧みな「しかけ」に多くの来館者の方に興味を持っていただき、班員が実際に作った「しかけ」を高く評価する記述が多く見受けられた。

### 方法

全体での共通項目として「展示内容」「展示の見やすさ」「展示解説」について5段階評価を求め、「印象に残った展示品」については自由記述として回答を求めた。また班別の追加項目として、本班は「絵本を読む人と作る人の二つの立場からの展示でしたが、これまでの絵本に対するイメージから何か変化したことがあればお書きください」の質問を設定し、回答を求めた。

### 結果

#### (1) 共通項目の結果

1、展示の内容について 2、展示の見やすさについて 3、展示の解説について  
5：とても良かった 4：良かった 3：普通 2：あまり良くなかった 1：良くなかった

#### (2) 班別項目について

##### 4、印象に残った展示品は何ですか

- カラフルだった昭和初期の絵本
- ぐりとぐら
- 絵本の原画
- 星の王子様
- ペーパークラフト

表1 全来館者人数と展示評価の平均値

点数と質問	5	4	3	2	1	合計	平均値
1. 展示内容	86	65	33	2	0	186	4.26
2. 見やすさ	79	73	29	2	0	183	4.25
3. 解説	68	76	35	5	1	185	4.11

表2 男性来館者人数と展示評価の平均値

点数と質問	5	4	3	2	1	合計	平均値
1. 展示内容	32	35	13	1	0	81	4.21
2. 見やすさ	27	37	17	1	0	82	4.1
3. 解説	22	37	18	4	0	81	4

表3 女性来館者人数と展示評価の平均値

点数と質問	5	4	3	2	1	合計	平均値
1. 展示内容	56	34	10	1	0	101	4.44
2. 見やすさ	52	36	11	1	0	101	4.44
3. 解説	46	36	17	1	1	101	4.24

- ヒトのからだ
- ハンズオン
- 原画と印刷物
- 360度の飛び出す絵本
- 不思議の国のアリス
- 仕掛け絵本
- 新井緑先生の絵本
- 展示を作った人たちが小さい頃に好きだった絵本たち
- 飛び出す絵本の作り方
- 絵本のお城
- 大きな仕掛け絵本
- 海外に伝わった日本文学
- 江戸時代のさるかに合戦
- 赤本
- 手作り絵本
- 今昔物語の記述など
- 布でできた絵本
- ハンズオンコーナー
- 人体の本

- 陸軍の絵本
- 欧米の絵本
- 絵本の多様化
- 原画と製品の違い
- ポスター大の解説文のデザインがとても素敵
- あかまるちゃんの構造がすごい
- 絵本の仕組みを自分たちで作っていたのがよかった
- 開くところを映像で展示してくれたらよかったのに
- 江戸時代の赤本
- 昭和、戦前の絵本
- ようせいのおしろのぶとうかい
- 布絵本、点字絵本などの多様性を表現していたコーナー
- 昔の絵入り本
- 原画
- 昔読んだ本があった
- 0さいからはじめる絵本
- 戦時中の絵本
- ちりめん本
- 江戸時代の草双紙
- 動物たちのすみか
- 最近の絵本

5、絵本を読む人と作る人の二つの立場からの展示でしたが、これまでの絵本に対するイメージから何か変化したことがあればお書きください。

<変化があった>

- 現代のものは多様化されていて見ているだけでも面白かった。
- 見るだけだったので今までは作者の苦労など考えたことはなかったが、今日の展示を見て一度原画で絵本を見てみたいと思いました。
- 海外の飛び出す絵本については見新しく視点が違って楽しい。
- 作る側の創意工夫が伺えて面白かった。
- 絵本は内容だけでなく、色彩のことまで深くこだわっていると知り、職人はすごいと思った。
- ただ単におもちゃの知識をえるための学習品としてのものではなく、芸術性も高いと思った。
- 飛び出す絵本の作り方がわかってよかった。
- もっぱら読む人の立場になり、子育てを思い出し楽しかったです。
- どちらも共通するポイントは紙、画面だということ。今、自分がどちらの立場にいるか考えるヒントになりました。
- 苦労話を知りたかった。
- 子供が作る人になるのも楽しいと思いました。子供ができたなら、いろんなことをさせてあげたい。
- 色々な絵本があると思った。
- 絵本を作る人の立場が少し分かった気がします。
- だんだん立体的になってきており書籍離れを考慮したからなのかとも思える。
- 子どもの考えも知りたかった。どんな絵本が人気があるのでしょうか。
- 絵本の色合いで微妙な違いがでるのが分かった。
- どんな風に作られているのか見られておもしろかったです。
- 立体絵本の種類の多さ。
- 絵本は見る側の認識しかありませんでしたが、実際作る過程などを見て、作る側の細やかさがよくわかる。
- 江戸期の赤本等を1つの絵本として捉えたのが面白かった。解説も丁寧だった。
- 人の優しさ、思いやりが伝わる内容の絵本がもっともっと増えて欲しいです。
- 飛び出す絵本などの展示のように子供達に



- とって楽しい絵本が増えればいいと感じた。
- 展示を見て「飾る絵本」という言葉が浮かびました。
  - 緻密な作業を通して作られるんだなと思った。
  - 絵本作製は大変。
  - 幼い頃に読んでいたものでもつくり方を見ていくと、もっと面白さなどが増すと感じた。
  - 絵本にもストーリーだけでなく、伝えたいメッセージが含まれていると感じた。
  - とびだす絵本の工程が面白かった。
  - 作り手が子どもたちに寄せる思いをより深く知ることが出来たように思う。
  - 作り手がかなり勉強になった。
  - 大人として絵本を再評価すべきであると認識した。
  - 絵本の製作は、時間がかかるのだなと思った。
  - 絵本=子ども向けという印象があったのですが、仕掛け絵本を見て、大人でも十分楽しめる作品なんだと思うようになった。
  - 一つの作品に様々な思いが込められていると分かって良かった。これからは一つ一つを大切にしていきたい。
  - 高い技術力が発揮されていると感じた。
  - 絵本が布でできていて、おもちゃのひとつになっていることを初めて知った。
  - 読み手が一瞬で読むことを、書き手が時間をかけてやっている。
  - 絵の原画と印刷したもので、色合いや受ける印象が微妙に違うことに気づいた。
  - 書籍としてではなく、芸術品、美術品というイメージになった。
  - 時代により絵本の持つ意味合いが変化するという事実。
  - 昔から日本の絵本を英訳したものがあったことに驚きました。
  - 絵本を作りたくなった。
  - しかけ絵本を作るのが大変そうと思った。
  - 読む人のことを考えながら書くことが必要だなと思いました。
  - 主体的な視点を取り入れられ、より楽しくなったと感じた。
  - とびだす絵本が全て手作業でつくられていること。
  - キンダーブックがそんなに昔からあることなど知らなかったので驚きでした。
  - 絵本を小さい子どもの見るものだと考えていたが、そうでもなくなった。
  - 絵本は子供が読むものというイメージが強かったですが、江戸時代など広い層の「読む人」がいたということでイメージが大きく変わりました。
  - どのように絵本がつくられているかがわかり、一つ一つの絵本に対する接し方がかわった。
  - とびだす絵本の作りの複雑さにおどろいた。
  - つくる時に色味がかわってしまっていることが残念に思った。原画を見てみたくなった。
  - 絵本が時代背景をあらわしているというのをはじめて知った。
  - 久しぶりに絵本が読みたくなりました。
  - 絵本は一種の芸術品だと思います。
  - 作り手からの絵本…大変なのだと思います。
  - 作り手の配慮があったのは知らなかったです。戦時中の絵本にも思想が入っていてびっくりしました。
  - 絵本には、作り手の努力、思いやり、想像力などがつまっていると思いました。
  - なんとなく読んでいたしかけ絵本の作りの複雑さや印刷した後のちがいはじめて知りました！
  - 作り手の愛情が感じられた。

- 絵本の原画を初めてみました。印刷前と後では、結構雰囲気が変わるんだなと思った。
- 作者の心意気を感じた。

#### <変化なし>

- 特にない。作り手の読み手を喜ばせようとする気持ちが分かった。
- 意図が少し分かりづらい。
- 絵入り本の歴史だけでも十分面白い。
- 読む人の立場というより歴史という感じでした。

#### 考 察

本展示において、「展示内容」「展示の見やすさ」「展示解説」の共通項目に対する評価は、どれも5段階中の4であったために、一部が著しく欠けていなかったと考える。しかし男性・女性のどちらも、「展示解説」の項目において数値が下がっていることが分かる。特に男性において、その傾向が顕著に表れていることから、男性においては「絵本」というテーマが少々取り付きにくかったのではと考える。

「4、印象に残った展示」においては、平均的に全ての展示品に興味をもっていただいたことが分かった。その中でも特に、しかけ絵本、絵本の原画、班員が実際に作った「しかけ絵本」の仕組みが、多くの来館者の方々に興味を持っていただいた。このことから自分達が本展示を通して伝えたかった「絵本の魅力」は、伝えることが出来たのではないかと考える。しかし「5、絵本を読む人と作る人の二つの立場からの展示でしたが、これまでの絵本に対するイメージから何か変化したことがあればお書きください」の質問において、質問設定の意図が十分には伝わらず、想定していたような答えとは違うものも少しあったことから、質問は単純明快にすべきだと考える。(上田裕人)

## 移る時代は鬼ばかり

### 要 約

展示の内容・見やすさ・解説について尋ねたところ、いずれも男性より女性の方が、わずかだが評価が高かった。解説については、内容や見やすさに比べ、評価が低い傾向がみられた。

印象深かった展示品として鬼瓦、大江山絵巻を挙げられる方が多く、他の展示品についてもまんべんなく興味を持ってもらえたと考えられる。

### 方 法

内容・見やすさ・解説について、それぞれ5段階での評価を求めた。また、追加項目として「4、印象に残った展示品は何ですか。」「5、展示をご覧になって、鬼の認識やイメージについてどう思われましたか?」という項目を設け、自由記述による回答を求めた。

### 結 果

#### (1) 共通質問項目について

1. 展示の内容について 2. 展示の見やすさについて 3. 展示の解説について  
5: とても良かった 4: 良かった 3: 普通 2: あまり良くなかった 1: 良くなかった

#### (2) 自由質問項目について

「4、印象に残った展示品は何ですか。」について図2で示した。なお、展示品名で分類できないものはその他に分類している。

鬼瓦と大江山絵巻が印象に残った方が多く、次いで別世界巻が続く。古代ブースのはじめの展示であることや、絵巻物に関心が集まりやすいことがうかがえる。

続いて、「5、展示をご覧になって、鬼の認識やイメージについてどう思われましたか。」

表1 合計人数と平均値

質問／点数	5	4	3	2	1	合計	平均
1. 内容	67人	65人	39人	5人	0人	176人	4.10
2. 見やすさ	73人	55人	44人	3人	1人	176人	4.11
3. 解説	63人	50人	49人	3人	0人	165人	4.04

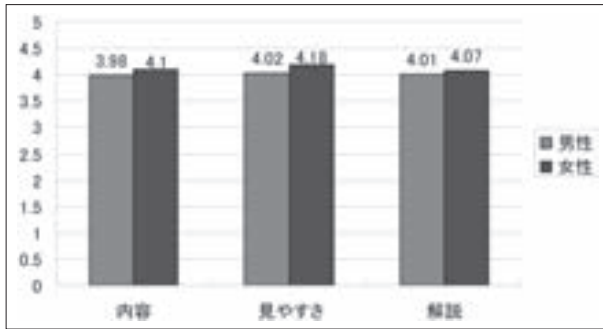


図1：性別ごとの評価平均（男性78名、女性98名）

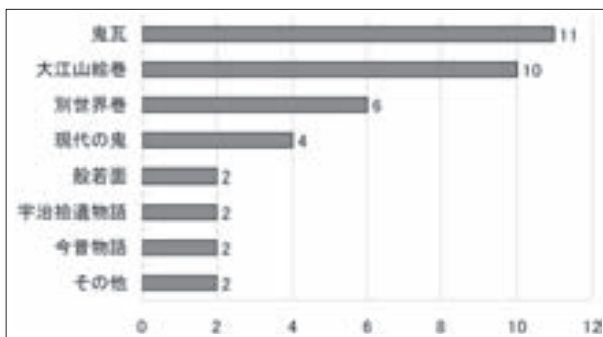


図2 印象に残った展示品の割合

か？」については自由記述式での回答を求めたため、その回答のうち内容の重複したものを省き以下に示した。なお、回答数は55であった。

- 昔と現代の鬼に対する捉え方の変化が見えた。
- 昔の方が悪の象徴として扱われている感じがした。
- 現代は異質なものとしてのイメージ。
- 良いイメージではない。
- この質問に答えるには、もう少し材料のバ

リエティが欲しかった。

- 本来の恐ろしさをもう一度呼び起こすのも面白いと思った。
- 身近。
- 時代によっていろいろに姿を変えていたの  
で、人のイメージによって姿を変える面白い存在だと思いました。
- 確かに現代の鬼はあまり怖くないなど、改めて思った。
- コミカルなイメージが強くなった。
- 現代の鬼も映像などで、商業的にも利用されていますね。
- 畏怖の対象としての「怖い」鬼も好きですが、どこか親しみのある鬼のイメージも好きです。
- 恐れ  
のイメージから展示をみて、逆にどう  
いうイメージか定まらなくなりました。
- 昔と今で鬼にたいしてのイメージが変化  
していることが分かりました。
- あまり変化なし。現代の鬼のイメージがし  
りすばみすぎる。もう少し何かあったはず。
- 今の鬼のイメージと、昔のそれとはかなり  
違うと認識した。
- とてもよかった。鬼はひょうきんだったり、  
優しくかったり、怖かったり良くも悪くも大  
切にされてきた想像物なのだと感じた。
- ちゃんとした文献に書いてあるんだと思  
った。
- 鬼は人を刺身で食べるというのが印象的  
でした。
- たしかに現代における鬼の必要性や、これ  
からの鬼のイメージについて考えさせられ  
ました。
- 今も昔も鬼というのは怖い恐ろしいもの。  
でも私は泣いた赤鬼が好きなのでそうい  
うやつばかりじゃないと思う（関係ないけど）。
- めっちゃ怖いイメージしかなかったですが、  
かわいいなとも思いました。

- マンガなどに出てきたらカッコいいと思ったり、過去の展示物などで見たら怖いと思ったり、見せ方によって様々だと思いました。
- 今も昔も鬼に対して“こわい”というイメージは変わらないんだなと思った。
- 鬼のイメージの移り変わりが印象的で現在の鬼はいい意味でも使うので悪いイメージばかりではない。
- もう少し展示品を増やしたほうが良いと思う。
- 鬼＝恐ろしいものではなく目に見える安心できるものとしたことでそれについて衝撃を受けた。
- 時代の移ろいにより、人々の鬼に対するイメージが確定にかわっていているということが如実だった。
- 恐ろしいものから、現代的な優しいものまで、イメージは多様です。
- 人に近い存在なんでしょうね。
- 鬼門については蝦夷征伐など日本の歴史ともう少し絡めて欲しかった。
- 現代では、鬼が必要なのかなと思いました。
- 言われてみると、鬼の認識は平安や鎌倉時代と今では大きく変わったなと思います。人々が鬼に対して昔ほど畏れを抱かなくなったのが大きいと思います。
- なじみやすい。
- 関大に有名な書物が置いてあるのに驚きました。
- 時代と共にキャラクター化されてきて、恐ろしいイメージが薄らいできていると思う。
- 昔からおそろしく描かれていると思っていたが、案外、人に近い絵などがあって意外だった。
- 多様な鬼がいるんだなと勉強になりました。
- 鬼はおもしろい存在。両義性。
- 現代になってどんどん俗化していくという

感じです。

- 最近「じごく」という絵本を読んだとこなのでよく似てると思った。
- 近世などの鬼のイメージは恐ろしいという印象を強く受けましたが、その中に風刺なども取り入れているのは面白いと思いました。
- 鬼がおそろしいものという昔のイメージから変わっていくかで見ると、現代は鬼よりおそろしいものが存在しているのかもしれない。
- 言われてみればという感じでした。
- ラムちゃんかわいい。
- 今の鬼はだいぶひょうきんなものになっているが、昔は人々の恐怖の対象であったのがよくわかった。あと、桃太郎の鬼退治のメンバーにはちゃんと意味があることを初めて知った。

「時代によって鬼のイメージが変わった」という回答が多く見られたが、鬼に対する良いイメージと悪いイメージ、身近でコミカルである、など各々鬼のイメージが違うということがうかがえる回答も多かった。

## 考 察

【共通質問項目】回答者全体でみた場合の平均値は、内容が4.10、見やすさが4.11、解説が4.04であった。また性別でみた場合、全ての項目で女性の評価が0.1ほど男性の評価を上回った。このことから、同じ展示でも男女で感じ方に差があることがわかる。

【自由質問項目】自由記述式での回答であったため無記入の回答者も多かったが、個人個人に様々な鬼の認識やイメージを持つことがわかった。鬼に対する各時代の認識の違いや移り変わりをテーマに展示をしたが、すべての時代にスポットを当てたため、パネルの解説の内容の薄さや、展示品の少なさを指摘さ

れることも多かった。展示テーマにふさわしい演出が不足していたと言え、もう少し展示に工夫すべき点があったと思われる。

(谷山百合香)

## 時代を巡る陵墓～認識の移ろい～

### 要 約

展示の内容、見やすさ、解説について尋ねたところ、いずれも男性より女性の方から高い評価を得られた。また、回答者の印象に残った展示物では、「英文高札」という回答が群を抜いて多い結果となった。

### 方 法

全体での共通項目として「内容」「見やすさ」「解説」について、5段階での評価を求め、「印象に残った展示物」については記述方式での回答を求めた。また、陵墓班の班別質問として「陵墓は今後どのようにあることが望ましいと思われましたか」という設問を設け、自由記述での回答を求めた。

### 結 果

#### 1. 共通項目の結果

1. 展示内容について
2. 展示の見やすさについて
3. 展示の解説について

表1. 共通項目の回答結果と平均

質問	点数					合計	平均
	5	4	3	2	1		
1. 内容	76人	77人	25人	2人	0人	180人	4.24
2. 見やすさ	71人	75人	28人	4人	0人	178人	4.15
3. 解説	81人	63人	35人	1人	0人	180人	4.23

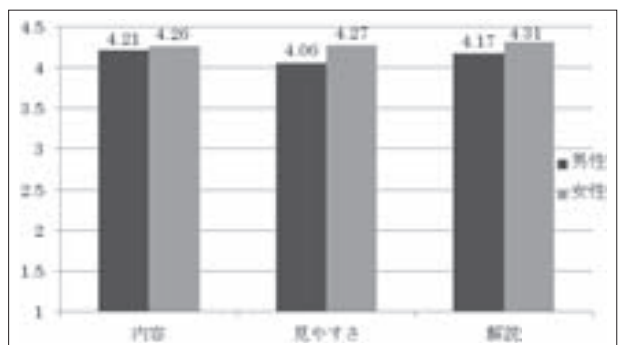


図1 性別ごとの評価の平均値 (男性82名、女性98名)

5：とても良かった 4：良かった 3：普通 2：あまり良くなかった 1：良くなかった

## 2. 班別項目について

### 4. 印象に残った展示物について

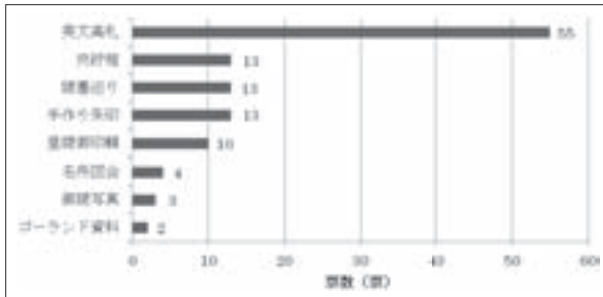


図2：印象に残った展示物の回答結果（113名）

### 5. 「陵墓は今後どのようにあるべきだと思われるですか？」

- ある程度の保存と公開。
- この質問は解答しにくいなあ。個々に希望などないと思われる。
- さわらない。
- しっかり後世に残していくもの。
- そのままの形で受け継がれていくことが良いと思います。
- そのまま保存してほしい。発掘してほしい気持ちもするけど…。
- できる限り調査して、保管したらいいと思う。
- どうにかして発掘し、中がどうなっているのかを調べてほしい。
- どの陵墓がどの埋葬者に該当するのか最新の調査で詳細を明らかにするべきだと思う。
- とりあえずDNA検査して欲しい。箸墓の卑弥呼説も不敬罪と言われようとも、日本史の解明のためにも宮内庁には発想の転換をおこなってもらいたい。
- まだまだ知られていない部分が沢山あるの

で新たな発掘も進め今あるものは周囲をきれいにし皆に知られるようにして歴史に触れていければと思います。

- みだりに触れてはいけないものとして。
- むずかしいですが、本人が好まれるスタイルでいいと思います。
- むずかしいですね…公開されるべきところはありますが、なんとも言えません。
- もうちょい発掘できていいのではないかしら。
- もっと気軽に見学できるようになればいいと思いました。
- もっと詳しい調査がなされるといいなと思いました。
- よく分かりません。
- より調査されるべきであると思います。
- 遺産としてきちんと保存したい。
- 一回ちゃんと掘るべき。
- 一般公開し、古墳時代を明確になればいいと思っている。
- 永久保存し、後世に残し伝えていくことが望ましいです。
- 可能であれば中に入れるようになる。(条件付きで)
- 皆でこれからも守っていくべき。(古墳＝墓なのであまり頻繁に掘りおこしたりするのは気が引けるなとも思いました…)
- 観光で利用していくとか。
- 宮内庁が出している看板は日本語だけだけど、国際化していく今、外国語を示したほうがいいのでは？
- 経済とかね合いをしつつもできるだけ残しておく。
- 研究のための調査にとどめて保存していくべきと考える。
- 研究者側としては公開してほしい気もするが、墓は静かに保ってほしい気もする。
- 現在定められている陵墓の中には、数々の

調査によって明らかにされているように、実際に葬られている人物とは異なった陵墓も中にはあると思います。でもその陵墓に重要な古墳であることには変わりないと思うので、大切に管理していくのがやはり望ましいと思います。

- 現代または将来に生かされるように普通の人も見えるように公開してほしい。
- 古墳として歴史文化遺産であることが望ましいと思った。
- 後世にこのままの姿で残るように保存していく。
- 公開が望ましい。
- 公開されて、過去の時代がみんなに分かるようになればいいですね。
- 公開してほしいし、しっかり保存もしておいてほしい。
- 公開できるものは公開したほうが良いとは思いました。でも公開しないことで保たれている環境というものもあるので一概にそうとは言えない気がします。
- 皇室財産であることも忘れず、ある程度の公開も必要か。
- 考古学者に研究させてあげれば良い。
- 今では昔ほど慣れ親しまれていませんが、重要な文化財の一つとして現代人が触れあって行ければと思います。
- 今のまま保存されることを願う。陵墓巡礼に興味を持った。
- 今後も、大切に保存していくべきだと思います。
- 最小限度の調査をすべき。
- 史跡、文化財としての保存・研究もすすめてほしいものですが、自然環境の面からも、森林や水質の管理も忘れないでほしいものです。
- 寺を見に行くことはあっても、古墳を見に行くことはないの、何か観光地化できた

らいいと思う。

- 次世代に今の状態で引き継いで欲しい。
- 呪術との関係をさぐってほしい。
- 昭和のようなめぐるべきものであるために丁寧に保護されるべきであると思いました。
- 新事実によって明らかになったことを正しく活用していくべきだと思います。
- 神聖な場所。
- 世界遺産登録。
- 生活にひそむ歴史を感じられるものであったらいいなと思った。
- 聖域だとは思いますが、もうちょい親しみやすくしてほしいと思いました。
- 地域と共存できればいいと思う。
- 中にある遺品や、はにわを研究して、誰の墓かを調べてほしいと思う。
- 適切な保存。
- 適切に保護されつつも、公開もされたい。
- 天皇制が存続するかどうかで決まる。
- 同じ状態で次世代に引き継ぐ。
- 難しい問題ですが、より科学的に解明されていくことが望ましいようには思います。
- 日本の歴史を明らかにすることで未来の考え方も変わると思うので、大切に扱われるべきだと思う。
- 破壊がおよぶ恐れのある陵は保存していくべき。
- 発掘ができればいいと思います。
- 発掘して貴重な史料を公開すべき。
- 発掘することが難しいので難しい問題である。
- 発掘調査など専門家への公開が必要
- 文化財、遺産として保存することが望ましいと思った。
- 文化財ですから、研究者の立ち入りを認めるべき。
- 保存していくことに意味があるという答えをもっと広げるべき。

- 陵墓というものに今迄ふれたことがないので分かりませんが、これからも聖なものがあるべきだと思います。
- 陵墓の状態が今以上に劣化しないように守って行ってほしいと思います。
- 陵墓に詳しくないので、わかりません。
- 歴史を今に伝える存在としてこれからもあってほしいです。できればそのままの変わらない姿で残っていてほしいと思いました。

#### 考 察

印象に残った展示物では「英文高札」が過

半数を占めていることから、当班の展示の目玉としては成功だったように思われる。

班別項目の「陵墓は今後どのようにあるべきだと思いますか？」の記述については、「発掘すべき」や「調査して公開すべき」などの回答が多く見られた。しかし一方で、「陵墓に詳しくないのでわからない」や「わからない」などの回答も見受けられた。より多くの来館者の方の意見を聞くためには、もう少し絞った質問にしてもよかったのではないかとと思われる。 (池田なみほ)



# 関西大学博物館実習展（講評）

日程 2012年11月11日(日)～11月16日(金) 10時～16時

場所 関西大学博物館第2展示室（簡文館内）

## 制服～女子たちの世界～

- 写真と解説がバランス良く配置されている。
- 学校だけではなく、仕事場や、男子の制服にも目を向けてほしかった。スペースがないので仕方がないかもしれない。
- 前半は見ごたえあった。後半は現代の現物展示のみで淡泊。
- 展示品が現代のものにかたよっていて、見学しても物足りない感がある。
- 展示の狙いがよくわからない。限りなく女子向けの内容。展示の説明を求めたが、できない部分があった。十分に事前打合せができていない。
- パネル展示が多すぎる（1ケースは全てパネル）。書籍については、発行年月日が必要（どの時代のことを説明しているのか、が一番大切）。
- 解説パネルのカットイングが若干ふぞろいの所がある。ほぼ展示と図録は一致しているが、図録に載っているのに展示に反映されていないことがあった（例えばスカートの巻き上げと裾切りを防ぐためのロゴの存在）。
- 女子特有かor制服なのか（「学校制服」？ 高校の制服以外もあるけど）。展示構成はOKか？ 歴史（明治～現代）とアレンジ・着くずしの2部？
- 最初の計画時には、内容の変更を考えた方がよいかとも思ったが、なんとか展示になったことで安心した。展示にしようとする努力はうかがえた。
- 展示方法に工夫が必要。
- セーラー服へのあこがれor愛着が女子にもある？ 制服の歴史の評価…時代背景のつまみをもう少し。女子が学ぶという画期的なでき事。
- 第1のケースに資料を展示すべき。解説札は展示資料ではない。まじめな展示という印象がある。
- 全体的にバランスがとれた展示になっている。
- 文学部以外の学生が集まって展示企画している。社会学部の学生なら、統計資料を入れるなり、今一步専門的アプローチが必要。展示⇒パネルをもっと統一化する。のぞき展示ケースと立面ケースがアンバランス。
- ライトに強弱をつけてみては。まとまりはいい。ポスター、デザインはいい。チームワークはよい感じ。

## 書く～手書きの大切さ、明日からできること～

- 手紙原本と翻刻・口語訳・用語解説がセットで示されるなど工夫が見られる。
- 手書きを強調したいのなら、もう少し、文字の違いがわかるようにしたい。

- 手紙文の翻刻のみで背景の説明がないのは寂しい。上品な展示で枯淡の味がする。
- 展示品と釈文がはなれていて、見にくいので工夫する必要がある。人物の説明が不十分（キャプションでの）。図録の目次構成は分かりやすかった。
- 手書きをテーマにしているのはわかるが、どこかの文学館の展示の一部を切り取ってきた感じ。菅橋彦や今東光など、展示だけではどんな人物かはわからない。
- 手紙の大切さを訴えているのに、便せんの書き方が誤っている。図録と展示のあいさつ文が違う。題を「書く」としたため、中をみるまで、手紙とはわからない。
- 展示と図録の内容が一致していない。図録の中には翻刻まで入っているのに展示されていない手紙がある（当山氏の手紙の一通）。図録の翻刻に誤読箇所がかなりあり、途中で大きく修正せざるを得なかったのは残念である。
- タイトルと展示内容は合っているか？ 「手紙」では？ 「手紙の内容」はあまり触れていないので、単に手紙の展示ではなく、「書く」に迫ることが必要だったのでは？ 再現展示はケース内でOKか？
- 展示構成は、わかりやすく、統一的に仕上げられ、展示としてまとまりがある。ただ「書く」そのものを展示しようとした試みが成功したか否かは判断がわかる。
- 手書の文書があいさつ文にあることは、心がなごむ。
- 書式・形式の尊重…逆の便利さは？ 手紙に重点がおかれているが、タイトルは「書く」である。メモの便利さ。絵本と協力しても良かった。
- <書く>というテーマはおもしろい。構成にまとまりがない。
- 重要なメッセージだが、展示から伝わってこないのは残念。
- ・菅橋彦の写真が違う（個人蔵だけに）。・書斎写真はどこ？ 植田家？ ・書見台の上、和本の展示、びみょうにズレている。→全体的にズレている。・書状、教則本—江戸・明治・大正・昭和（図書館に数万冊）別冊太陽ではあまりに弱い。・展示の便せんは本物を！
- 「書く、語り、見る、考え、伝える」といったように、大サイン名称を短くしては？ 展示ストーリーと図録の流れはよい。

### 絵本～隠された秘密～

- オーソドックスな展示ながらバランス良く展示されている。原画の展示など工夫されているが、見る人にアピールをすることも必要。
- 展示に工夫が見られる。外国のものは別にして日本のものだけにした方が面白さが出せる。
- ハレパネの切り方きたない。説明、詳細でよい。展示にしかけがあって面白い。
- 読み手：全体的によくまとまっていたと思います。作り手：作る過程が展示からは、分かりにくいです。
- 展示内容がまっぶたつに分かれている。飛び出す絵本だったら、そちらだけに限ってページを開くと立ち上がる仕組みなどを紹介する展示にした方がよかったですのでは。歴史の部分も中途半端な印象を受ける。図録はもう少し色が良ければ…。
- 図録と展示のあいさつ文が違う。図録と展示、構成要素の「章」の名前など一致しない。図録と展示、解説、製造過程図など一致しない。ポスターも図録も「絵本」のイメージをデザ

イン化できていない。

- 図録の内容が展示に反映されておらず、ダイジェストのようになっている。立体的に動くのが、どのようにパーツをくみあわせて動かすのか、解説がほしかった。部品の羅列に終わっているのが残念。
- ～隠された秘密～、これがどの点なのか…少し焦点がぼやけている感じがします。立体絵本（しかけ）のしくみは、もう少し説明が必要か。昭和期＝昭和戦前期に限定？
- 展示内容を制作と歴史に分離したのは成功している。図録も工夫はみられるが、体裁がととのっていないので造本そのものを学ぶ必要あり。
- 資料数も多いし、触れる展示も行っており、全体的にまとまっていた。
- 昔の絵本…時に定番のものの歴史を比べる面白さがあった。仕掛け絵本の研究。そこからの発展は？しかけ絵本と素朴な平面画絵本との対比もほしかった。絵本の多様化…いろいろな絵本のあり方をよくまとめている。温かみ…書に通じるので協力も可。
- よい展示だと思いました（特に製作の方）。子供の絵本とは異なる絵本展示も考えられるのではないか。
- 展示の方法、資料の選択がいい。
- 展示はこなれていたと思う。が、歴史的経緯だけでなく、現在の受容者である児童の好みなども取り入れたらどうか？ 原画の展示がひどい。
- ポスター散漫。展示も散漫、群として見せる（強弱）。展示ストーリーは二元的でおもしろい。解説文を対比的にしてみてもは。図録も上下にして、対比しては。ごあいさつの下がきたない。

### 移る時代は鬼ばかり

- ポスターは良い出来だが、展示にもうひと工夫が必要。展示レイアウトには当然デザインという側面がある。
- 着眼点が面白いが、時代による変化がもう少しわかり難い。
- 古代～中世などに区切ったのは分かりやすいが、それぞれ1点のみの展示なので、特徴がみえなかった。
- スペースや、展示品の数を見ると、通史として鬼を取り上げたことは、欲張りすぎかと思えます。もっと内容をしぼったほうがよいと思いました。
- テーマが大きすぎるため、展示が物足りない。「大江山絵巻」を展示ケース一杯に広げて中心に置いて、他の酒吞童子絵巻を壁面にパネルにしてストーリーを紹介した方がもっと良くなったと思う。絵巻を見つけた時点で、展示ストーリーを変える勇気が欲しかった。
- 図録「御挨拶」≒展示「はじめに」よく似ているが少しちがう。古代の資料に江戸時代の版本は使えない。時代による変遷がわかりにくい。図録の余白が目立つ、画像の質も考えるべき。
- 解説文が小さい。特に時代の特徴を記したパネルが小さい。サイズも文字も大きくした方がよかった。展示品が少なく、少し寂しい感じがする。
- タイトル？ コンセプトは伝わっているか？ 古代…近世、現代：近代が抜けているのはなぜ？ 「鬼」のイメージが明らかに変化しているのがわかる所、面白かった。

- 展示構成はわかりやすいので、展示は見やすい。時代の変遷も理解しやすい。ただポスターの手をちょん切っている様子はやや難がある。
- 年代別の資料数が少ない。
- 鬼の定義のようなもの、現代の鬼への歴史と有様の比較は？ 冒頭とくくりに出てくる「現代に鬼は必要なのか？」をもっと強調しても良かった。鬼の役割は？
- テーマ（題名）は軽いパロディーで、それ故か展示が軽くなっている。模本（写）は、少ない方がよい。
- 全体的に迫りに欠ける展示内容。現代社会における鬼の意味を迫及してほしかった。
- 壁面展示にひと工夫必要。鬼のイメージがつかみにくい。資料のキャラが目につくが、関連性が弱い。
- ポスター、絵の選択に配慮（手とはさみ）。展示ストーリー、大サインはシンプルでいいが、鬼を感じさせるものがほしい。タテ、ヨコのサイン、解説、キャプションを統一。

#### 時代を巡る陵墓～認識の移ろい～

- 皇陵巡拝ブームの背景が示されれば、さらに良かったのだが。
- 初めのあいさつ文、文字が小さい。近代の説明がもう少し足りない。
- 内容的には高度でマニアックなものを扱っているが、説明がまじめすぎて固い。
- 全体的によくまとまっていて、分かりやすかったです。
- 壁面が空いていてもったいない。「認識の移ろい」とあるが、品物は並んでいるが、お客さんにそれを意識してもらえるかどうかについてはむずかしいのでは。『延喜式』を中世と書いたり、英文高札が「旧崇神天皇陵」であるようなパネル表記は問題がある。紹介されている陵墓は古墳ばかりだが、陵墓は古墳だけですか？
- 章解説（第3・4章）のパネルが大きすぎて原物がかすむ。展示品が目立つ工夫が必要。
- 写真を色紙に貼りつけただけの展示はあまりにもみすぼらしい。貼りパネのすみがゆがんでいるものがある。のぞき込みケースの平面にそのまま資料を並べているが、斜めの展示台などを使う工夫がほかった。
- タイトル？ 解説の行間がそろっていないのか、読みづらい。文体の統一もチェックを。
- 陵墓は扱いがむずかしい。木製の札を展示物に加えたのは正解。ただし、「棺」単独の展示はやや難あり。また、ポスターの階段部分の「入場無料」記載にも難あり。
- 陵墓名と古墳名が混っている。理由があって意識的に行うとの説明。「あいさつ」パネルが小さい。全体的にもう1つ工夫が必要。
- 閉鎖空間のイメージが強い陵墓をもう少しわかりやすく親しみやすく、そんな存在にならないものか？ という（学生でないと許されない）感覚をもっと多く出せなかったかな？
- 二つのメイン作品が展示できたことはよい。違うかたちで構成できたのではないか。
- 目玉の資料はあるが、それらの前後の展示がうまくつながっていない。解説パネルの文字の大きさも再考すべき。
- 現代の陵墓に近接する人々の思いなども入れたらどうか。展示解説、キャプションが大きすぎる。

- 全体にきたない。既存パネルに頼りすぎ。デザインが不統一。加工が必要。ポスター、文字に色を使いすぎ。本のまま、展示としての加工を。

## 総 評

- ・展示テーマに対して、その内容が十分に練られていない感がある（特に制服・鬼・手紙）。  
・展示品のモノとしてのデータが不十分、図録を見ても大きさすら分からない。
- 全体的に：班内の情報共有ができていない。
- 共通して、タイトルと内容のズレが気になりました（ねらいを的確に表すことは難しいですが）。解説のチェックが必要。文字の大きさ、行間、文字数、文体など。展示の位置、そろっているかどうか。初めて観る人、予備知識のない人に通じるかどうか。
- 学芸員として、実物資料を教育的配慮にもとづいて展示する、という原則について、考えることが多い展示会でした。博物館の展示として「どうかなあ」というテーマが何とかなりになっているものがある一方で、よく見かける展示テーマでも、難しい部分があるものだという事を再確認しました。「制服」は、博物館の展示会としてはどうかと思いましたが、形にはなっています。ただし、博物館で実施することを推奨できるかという点、それには問題があるように思います。「陵墓」では、難しいテーマを扱っているという自覚が乏しいように思いました。「棺」を展示するのであれば、多くの考古資料に埋没させないと、問題が出てくるでしょうし、「鬼」の展示のポスターの絵も大きく扱うには問題があるものでしょう。このような点で、考えていただく点の多い展示会であったように思います。
- 全体としてのポイントは？ 面白いのは？ 陵のスタンプラリー。展示物の絵本が良好。
- 全体として毎年小さくまとまっていく。ネットで調べられない分野にふみこむ。説明は各班、例年よりまし。
- ・ポスター：日時・場所・アクセス図、仮想アクティビティ（でもいいから）をのせる。  
・タテ書き、ヨコ書きが入りみだれるので、場所取りからはじめてみては？

# 平成24年度 博物館実習報告

## — 受講生のレポートから —

実習展での取り組みと反省

文10-337 櫻井優子

### 1. 初めに

博物館実習を受けたこの1年は、私の中でとても大きな経験となった。この授業では学芸員になるために必要な知識を教わり、実際に資料を取り扱うこともあった。本物の刀剣を手入れしたり、茶室でお茶の作法を学んだりしたのもめったにない経験である。また、博物館や美術館の見学は日曜日に行なったので体力的にも時間的にも負担ではあったが、様々な施設を見て回ることができる良い機会だったと思う。博物館のバックヤードや学芸員が抱えている問題など、実習生だからこそお聞きすることができた話も多かった。しかし、中でも忘れることができないのが実習展である。実習生が企画し、資料を集め、展示するといった内容だったが、短い期間の中で展示を完成させるのが本当に大変で、何度も行き詰った。実習展では失敗したこともあり、その反省を活かせるように、ここでは実習展について述べていきたい。

### 2. 実習展

#### ①班編成とテーマ

実習展について詳しい説明があったのは、6月15日の授業であった。この日にさっそく班を作ることになり、私たちは10人ほどの班になった。専修は様々で、私の所属する日本史・文化遺産学専修の他に、世界史・英米文化・情報文化専修の人がいた。このメンバーでテーマを決めようとしたのだが、やはり興味がばらばらで実現できるかどうか分からない意見が多く、なかなか決まらなかった。そこで、森先生にコレクターやマニアがいるテーマにすると良いというアドバイスをいただいた。残念なことに私たちの中にそういった人はいなかったが、「絵本がとても好きなのだがどうだろうか」という意見が出た。知り合いの先生が絵本に詳しく、もしかすると貸していただけるかもしれないとのことである。私も小さい頃は絵本が好きでよく読んでいたが、メンバーの中にも同じような人が多かったので、テーマは「絵本」に決定した。その後、リーダーと副リーダーが土曜日のクラスにも声を掛けたところ、興味を持ってもらえたらしく、メンバーが16人になる。

#### ②展示内容

「絵本」ではテーマが広すぎるので、絵本の何をするのかを更に具体的に話し合っていく必要があった。8月2日から4日は博物館実習で東京の博物館を見学することになっている。この見学

では班で行動できる自由時間があり、展示の参考やテーマを深める手掛かりになりそうな博物館や美術館をいくつか探しておいた。その結果、東京藝術大学大学美術館・国際子ども図書館・ちひろ美術館・いたばしボローニャ子ども絵本館・紙の博物館を見て回るようになった。資料の名前や気付いた点などをまとめるプリントを班の方が用意してくれたのでそれに書き込みをし、どのような展示をしたいのかを考えるようにしていた。そして、時間がある時に全員で集まって報告したのである。しかし、具体的にどのような展示内容にするか話し合ったところ、「歴史をしたい」という意見と「歴史ではなく制作についての展示をしたい」という意見とが対立した。そこで出たのが、「読み手側」グループと「作り手側」グループの2つに分かれて展示するという案である。これ以後、私は「読み手側」グループとして展示作業を行った。また、人数が多く、全員が集まることはなかなかできないので、関西大学のSNSを通して進めていく。

### ③「読み手側」グループの展示内容

読み手側では、昔から今に至る絵本の変遷を辿り、多種多様な絵本の魅力を知ってもらえるような展示を目指した。まずは3つの項目に分け、「絵本の変遷を知る」で赤本や黒本といった昔の絵本を、「絵本の今を知る」で仕掛け絵本をはじめとする現在の絵本を、「絵本の活用を知る」で布絵本といった子育てなどで使われている絵本を紹介していくことになる。赤本や黒本は関大図書館に所蔵されており、仕掛け絵本は黒田先生や米田先生にお借りできることになった。また、グループの人が持っている絵本も使わせてもらい、江戸時代と現在の絵本は確保できた。

しかし、明治から昭和までの絵本はすぐに行き詰まる。この時代の絵本をたくさん所蔵している国際児童文学館に貸出をお願いしたが、希望した本の多くは原本で、貸出するには梱包・輸送の専門業者か学芸員資格の保持者がいないとできないとのことだった。そこで、大阪府立中央図書館にある同等の本なら実習生でも借りることができると教えていただく。しかし、貸出先は関西大学博物館でなくてはいけないそうなので、断念することになった。国際児童文学館をすっかり頼ってしまっていたので他にあてもなくて困っていたが、吹田市立博物館の副館長もお務めになっている藤井先生に伺ってみた。先生によると、吹田市立博物館には『チルドレンブック』という本があるそうだ。また、前に吹田市立平和祈念資料館から『キンダーブック』を借りたことがあるという情報もいただいた。

### ④資料の貸出

『チルドレンブック』は他の人にお任せし、私は『キンダーブック』をお借りできないか吹田市立平和祈念資料館に交渉することになった。資料館は阪急南千里駅のすぐ側にあり、お借りできないかお伺いしたところ快く承諾していただいた。そこで、事前にお伺いする日をお伝えし、『キンダーブック』の調書をとらせていただいた。資料は原本で目立った汚れもなく色もきれいだったが、半分に折られていたのでそこだけが不安だった。運搬方法は特に条件がなく、傷付くことさえなければ問題ないそうだ。これ以外にも『ニッポンエホン・リクノニッポン』の複製本も貸していただけることになった。これは資料館の来館者に中を見てもらえるように職員さんが作成されたもので、ハンズオンとして使わせていただけるそうである。本来ならこの時点で企画展覧が必要だったらしく、職員さんにご迷惑をおかけしてしまった。まだ書類ができていないという

こともあり、次にお伺いする時にお渡しすることになった。

資料をお借りしたのは11月2日で、前回お渡しできなかった企画展案・実施案・借用書などの書類を準備しておいた。梱包はビニールの袋だけで大丈夫だとおっしゃられていたが、何かあってはいけないのでエアークラップ・薄葉紙・ダンボールの板を使って梱包した。実習展では何度か梱包する場面があり、授業で習った知識を活かすことができた。

実習展が始まる前に図録をお渡しするようにアドバイスしていただいたので、お礼状とともに送らせていただいた。

### ⑤展示作業

私は昭和コーナーの担当で、ここに展示するのは『キンダーブック』・『チルドレンブック』2冊・講談社の絵本『孫悟空・火ノ山ノマキ』の4冊である。『キンダーブック』は折り目がついているのとスペースの問題で額に入れて壁際に吊るすことになった。また、『孫悟空・火ノ山ノマキ』だけは中が見えるように開いていたのだが、もっと開いて展示したほうが良いというアドバイスをいただいたので、『チルドレンブック』も1冊は開き、もう1冊は表紙が上になるように閉じた状態で置くことにした。また、この『チルドレンブック』は傷んでいるため、照明を100ルクスマまで落としてほしいと言われていたので、キャプションの文字が見えやすいように太字にしてもらった。

私たちの班は随分と遅れてしまい、最後まで残って作業をしていたが、なんとか完成することができた。

## 3. 実習展

実習展は11月11日から16日の6日間で、私がシフトに入っていたのは13日の1・2時限目と16日の1時限目である。13日は午前中で来館者がとても少なく解説することがあまりなかったが、16日は伊藤信明先生の授業で来られた生徒に解説する機会があった。実際に展示の説明をしようと思ったら意外と言葉が出てこず、上手く話すことができなかった。特に仕掛け絵本の仕組みを展示したコーナーが難しかった。あらかじめ展示解説用の冊子を班で作っていたのだが、仕掛けの説明は伝えにくいようだった。

## 4. 返却

私が担当した吹田市立平和祈念資料館への資料の返却は、実習展が終わった次の日に行った。お借りした時と同じように梱包して資料館まで運び、資料の返却の際にお渡ししていた借用書を受け取った。

他のメンバーの返却と片付けも完了したが、後になって事務室の職員さんにお借りしていた絵本を返していないことが分かった。絵本を実習室で拝見させていただいた時に、まだ検討中だったためロッカーに置いていたのを忘れていたのである。すぐに事務室へ行き、謝罪をした。

## 5. 反省

班全体としては、読み手側と作り手側のグループで情報があまり共有できていなかったのが反



省点である。当初はお互いに進み具合を確かめながら行う予定だったが、時間がなかったこともあり、お互いに何をしているのかよく分からない状態で展示作業をしていた。講評でご指摘を受けたことの中には、協力できていたなら直せたものもあったように思う。また、原画や原本は貴重な資料にも関わらず、他の資料と同じように展示してしまったのでアピールできていないのご指摘もあった。森先生が「やま」を組み込むようにおっしゃっていたが、これらの資料を上手く活用すれば平坦な展示に強弱がついたかもしれない。

個人的な反省としては、お借りしていた絵本を返却し忘れていたことである。貸出に関する書類が完成していない時期であり、借りるかどうかが検討中でもあったために忘れてしまったのだが、あってはならないことだった。好意で見せていただいたのにご迷惑をおかけしてしまったので、とても申し訳なかった。展示に関しては、次のコーナーへつなげる展示ができず、昭和期から現代の絵本へと一気に飛んでしまったことである。戦前の絵本はお借りすることができたのだが、戦後の絵本は手に入らなかったのだ。絵本史の一部として戦後のことを図録には書いたが、展示してはなかったのが、北川先生がおっしゃるように「図録の内容のわりに展示が残念」になってしまったのだと思う。

## 6. 最後に

実習展は大変だったが、非常に多くのことを学ぶことができた。資料収集、展示作業、図録作成など、実際に経験したからこそ分かったことが数え切れないほどある。歴史を入れるかどうかで対立したが、興味や専門分野によって考えも違い、改めて人と仕事を行う難しさを知ることができた。今となっては、もっと班の中で話し合えば良かったと後悔することもあるが、この反省を今後に活かしていきたい。

美術館から、これからの博物館を考える。

文10-341 佐々木 久美

### 美術館との出会い

初めて美術館を訪れた時のことは、今でもはっきりと覚えている。私が中学生の頃のことなので、もう十年ほど前になるのだと思うと、何だかとても感慨深い。当時の私は、絵画というものにふんわりと興味を持ってはいたのだが、美術館と聞くとやはり敷居の高いイメージがあって、足を運ぶになかなか至らなかった。今では漫画やアニメに関係する展覧会や、親子で楽しめるような絵本の展覧会なども多く開かれ、美術館のそういうイメージは払拭されつつあると思うのだが、あの頃はまだそういった展覧会もあまりなく、来館者の多くは純粋に絵画を楽しみに来る人、そしてそれを「学問」として吸収しようとする人ばかりだったように思う。

少し話は逸れるのだが、私の趣味の一つに読書もあり、その頃は英語圏で単一ジャンルとして確立されて広まっていた、ヤングアダルト文学の翻訳書を読み込んでいた。中でも特にお気に入りだったのが、『クローディアの秘密』というタイトルの本で、主人公が弟と共にメトロポリタン美術館へ家出をしに行くという内容のものだ。あまりに面白かったものだから、母にも勧めて読んでもらったし、美術館への憧れも持つようになった。もしかしたら私は、天使の像がミケランジェロの作だという秘密を得た、クローディアのようになりたかったのかもしれない。美術館への家出だなんて、なんて素敵で心躍る計画なのだろうと、大人になった今でも思う。彼女は夜な夜な数多の美術品の、昼とはまた印象の異なる表情を、存分に眺めることが出来たのだ。

そういった読書経験などから、私の美術館や美術品への関心は次第に高まっていった。欧米では子どもでも気軽に訪れることの出来る文化施設である。美術作品に触れるのに、本来なら壁や敷居など無い筈なのだ。そんな折、母に誘われて初めて美術館へ行く機会を得て、サントリーミュージアム（現・天保山特設ギャラリー）で開催されていた、「バルビゾン派から印象派」という展覧会を見に行った。本当の芸術作品というものを、初めて間近でじっくりと目にした。ものによっては壁一面を占めてしまうくらいの大きさながら、どれも驚くほど繊細で、心が吸い込まれてしまうような錯覚に陥っていた。美術の教科書で見たミレーの落穂拾いや、クッキーの缶の絵が好きだったルノワールの作品の数々が、整然かつ優雅に並んでいる。しかし、それまで目にしてきた媒体と決定的に違うのは、それが原画だということで、作者の息遣いに耳を澄ませるようなして筆致をまじまじと観察することが出来るのだ。油絵独特のつやつやした質感や凹凸は、印刷で再現するのは難しいことだろう。私はこの時、感動という言葉では尽くせない静かな衝撃を受けていて、印刷物ではなく美術館という場所で絵画を眺める意義を、ひしひしと感じたのだった。

### 美術館での職業体験

初めて美術館の扉を叩いて以来、フライヤーなどで自分の琴線に触れた展覧会があれば、京都や兵庫まで足を延ばすようになった。バルビゾン派や印象派を中心に、次第に油絵だけに留まらず、ロートレックや、ミュシャに代表されるアール・ヌーヴォーのリトグラフ作品などにも興味

が広がっていった。この頃にはもう、美術館という華やかなのにある意味では非常にシンプルな空間の虜だった。

そうした日々を過ごしている時、中学校で職業体験の課題が出た。この課題というのが、自身で選んだ職場に生徒が個人個人でアポを取り、凡そ三日間の日程で就労するといった内容のもので、クラスの友人の多くは親のつてを頼ったり、近所のお店などを職業体験の場としていたのだが、私はどうしても美術館の内部を知りたくて、美術館をその場として交渉することを決めた。担任の先生に相談すると、美術館での職業体験は過去に例が無いそうでかなり驚かれ、また生徒の大半は地元で済ませようとしていたので、遠方まで出向く子はそうそう居ないとのことだった。けれども先生は私の考えを汲んで後押ししてくれ、初めて行った美術館であり、最も行く頻度の高かった美術館でもある、前述のサントリーミュージアムにアポを取るに漕ぎ着けたのだ。

まずは電話を掛けて交渉してみたのだが、その時点からとても好意的に対応してくださった。後から聞いた話だと、何度か付近の学校の生徒を職業体験で迎え入れたことがあり、しかしその学校では先生が場所を指定するので、自ら望んで美術館で職業体験をしたいと連絡を取った私を、面白いと思ってくださったそうだ。展示室での就労は流石に無理だったが、ミュージアムショップではどうかと提案して頂き、是非お願いしますと答えて三日間お世話になった。図録を主として書籍の搬入もあり、存外に肉体労働だったが、それ以上に好きなものに囲まれている時間は幸せだった。加えて、収蔵庫などもちらりと覗かせて頂き、私の人生の中でも特に記憶に残る経験になった。恐らくこの体験が、私の学芸員資格取得を目指す基盤になっている。

## 昨今の展覧会の印象

ここ数年で、博物館や美術館を訪れる層は随分と広がったと個人的には感じている。私が美術館巡りを趣味にし始めた頃は、家族連れやカップルはおろか、40代以降のご婦人もあまり連れ立って来館しているようには思わなかった。若者も見るとからに芸術系の学生をちらほら見掛ける程度で、10代から20代にかけての人を目にすること自体が珍しいくらいだったのだ。その為、展示室はゆったりとした空気が漂っていて、美術品を鑑賞するのにとても適した空間だったと私は思っている。

来館者の層が拡大されていくこと自体は、芸術作品や歴史資料などの鑑賞の場を、隔たりを作ることなく一般に広く開け放っているという点では良いことなのだと思う。ただ、十年前の博物館事情を知らないので容易には比較できないが、最近の博物館は背景事情もあってか、来館者数を稼ぐことに懸命になるあまり、マナーに関しては随分と緩くなってしまっている気がする。扉を広く開放すれば、それだけ様々な人が入ってくることになる。その全員が博物館や美術館に慣れていて、いわゆる暗黙の了解と呼ばれる事柄を心得ている訳でもないだろう。いろんな人に鑑賞の場と機会を与えるのみではなく、そのマナーについて教育する必要もあるのではないだろうか。賑わいがあるのと、騒がしいのは全く違うことだ。

## 実習展を通して

企画展示に向けて本格的に動き始めたのは秋口だったが、夏の東京実習の際にはグループの皆でテーマについて掘り下げて練っていた。この時には絵本というテーマは決定事項だったので、そ

れを展示でどう取り扱うかについてなど、参考になりそうな東京の博物館を見て回りながら各々で考え、集まっては意見交換をした。人数が多いのもあって、何度か対立し分裂の危機という淵に立ったりもしたが、読み手と作り手の二つの視点から絵本の魅力を追う展示、というところで何とか収まった。展示にあたり絵本について咀嚼していく中で、グループ内での方向性を噛み合わせていったが、講評でも触れて頂いた絵本の温かみや親しみなどは、こういった作業の中でメンバーが各自でじわじわと認識し、一緒に準備を進める内に共有できたものだと私は考えている。

絵本と云うテーマを始めに掲げたのは私だった。個人的な意見になるが、私が絵本を展示のテーマに推薦したのは幾つか理由がある。一つ目に、比較的扱いやすく形も殆ど定型なので、展示の構想を練るのにも楽だろうということ。二つ目に、今はどうあれ昔は皆が触れていただろうという点で、誰にでも取っ付きやすいということだ。万人に触れてもらいやすいテーマとは、最近の博物館や美術館がしばしば取り扱うもので、これからの博物館を考える上で重要な鍵になるのではないだろうか。

### 博物館のこれからは

東京で開催されていた時からずっと、関西にも来てくれないかと思っていたアートアクアリウム展が大阪に上陸したとのことだったので、12月の初めに行ってきた。展示の感想は主旨が逸れるので述べはしないが、鑑賞マナーについて思うところがあったのでそこに触れたい。撮影OKの展示だった為にカメラや携帯電話を構える人が目立ち、撮影会ようになっていたことが非常に気になった。開催側がOKを出しているのに明らかなマナー違反という訳ではないのだが、折角の演出された空間が台無しだと私は感じた。来場の記念だったり、綺麗なものだったり、写真として残しておきたいという気持ちはとても理解できるし否定はしない。しかし、それは実際の展示を前に優先させるものではないし、他の鑑賞者の妨げになってはならない。何も撮影全般が駄目だと言うのではなく、少しは自重するという考えがあっても良いのではないかと私は思うのである。そして出来れば、静かに芸術を鑑賞することを好むような人も居るのだと、頭の片隅にでも置いて欲しいのだ。少なくとも私は静謐な空間で眺める絵画を愛しく感じるし、前述したように、賑わいがあるのと騒がしいのはまた別の事柄だ。

さて、これからの博物館像なのだが、学問的専門性を維持しつつ、誰にでも開かれた空間というものが求められている気がする。従来の展示は、学問的要素の強いお堅いイメージを纏うものだったと私は考えている。しかしこれでは一般には受け入れられ難く、公立とか私立とかの話は置いて、公共の施設である博物館としては如何なものだろうか。かといって逆に一般に受け入れられ易い内容にすれば、高い次元の情報を求めている層には物足りなく感じられてしまうことだろう。加えて、噛み砕いた内容ばかりを取り扱っていたのでは、博物館のアイデンティティを形成する要素の一つでもあるだろう専門性というものに、仄かながらに疑問が湧いてくる。

ある授業で、子どもを博物館に誘致するにはという課題が出た際に、エンターテイメント性のある博物館というものを提唱したことがある。多数の賛同を得た中、少数ではあるけれど否定的な意見も頂いた。その中身は、エンターテイメント性の博物館なんて博物館の本質を見失ってはいないか、それは博物館とは言わないのではないか、というものだったのだが、提案した本人もそれは考えていたことではあった。ところが、最近ではワンピース展を始めとして、エンターテ

イメント性の高い展示はどんどん増加しつつあって、またその需要はかなりのものだと聞く。あれも一応は博物館の範疇に入るものだろう。

これからの博物館とは、こういった相反する内容のどちらをも立てるといふ課題が付いて回るのではないかと私は思う。それを解決していくには、恐らく色々な方法があるのだろうが、私が考えるのは現場の人々が毎回の来館者の反応を計るなどして、地道に経験を重ねては新しい要素を取り入れ、徐々に変化させていくという真摯な姿勢だ。そして今後は、展示にもちょっとした遊び心やデザイン性が組み込まれていることが好まれるようになっていくのではないかと、私は予想している。現在の博物館を取り巻く環境はきっと、過去にも何度か訪れた転換期の一つなのだ。

## 『移る時代は鬼ばかり』を振り返って

文10-372 清水文香

### 1. 準備

#### (a) 企画

私たち鬼班は、班になってすぐに妖怪についての展示をするという大まかな方針を決めた。これは、その時の班員7名が全員、日本史・文化遺産学専修に所属しており、妖怪に興味を持つ人が多かったためである。大まかな方針を決定した後に班員の役割を決めたが、担当者はその分野の責任者であり、できる作業はなるべく全員で負担することにした。私は班長を務めることになった。その後、先生に班の人数が少ないのではないかという指摘を受け、土曜授業を受講している方に募って、新たに2名を迎えた。

夏休みは帰省や旅行、アルバイトがあるため、あまり集まれないと判断し、インターネットでメーリングリストと掲示板を借りて話し合った。「妖怪」ではテーマが大きすぎるということで、もっと絞ったテーマにするべく意見を出し合ったが中々決まらず、結局「鬼」と決まるまでにおよそ1カ月を要したが、8月に入る前には無事にテーマを決める事ができた。展示品を借りられるか、なぜその展示になったのかを説明できるか、展示構想を練る事ができるか、という3つの視点を軸として決定した。主にインターネットの掲示板で話し合いを行ったため、積極的に参加した班員とそうでない班員が分かれてしまったのは掲示板を使用した弊害であった。しかし、意見募集の締め切り前に書き込みを促すメールを送り、全員が発言するように工夫したことで全員の意見を反映してテーマを決める事が出来たように思う。

#### (b) 展示品の収集と調査

前述したとおり、テーマを決める時点で展示品を借りられるかという点を考慮していたため、展示品の収集にはあまり苦労しなかった。しかし、展示予定だった掛け軸、『赤鬼青鬼図』（森一鳳画、関西大学図書館所蔵）が事前調査で分かっていた大きさより縦に長く、展示を断念する事になってしまった。その『赤鬼青鬼図』の代わりに、黒田先生が博物館実習室の棚から発見してくださった『絵巻大江山』を展示する事になったが、元々は展示予定になかった絵巻であったため、早い者勝ちだった展示台を十分に確保できず、小さくしか展示する事ができなかったのが残念である。

調査については、できる作業はなるべく全員で負担するという方針に基づき、各自で分担して行ったため、調査成果には偏りがあった。そのため、図録を提出し終わってから、記述の方法についての指摘などを受けて訂正をすることになってしまった。また、調査成果を十分に共有し合う時間が設けられなかった。しかし、その分図録担当者の負担を減らすことができた。

### 2. 展示

#### (a) 展示方法

私たちは、「鬼」をテーマとし、鬼への認識が過去と現在では異なっていることを伝えたかった

ため、時代別の展示を行った。古代から中世、近世、現代という4つの区切りに分けたが、その時代ごとの導入として準備していたキャプションが小さすぎたのが悔やむべき点である。しかし、アンケートを見ると、当初の目的であった鬼への認識の移り変わりが多くの人に理解してもらえたように感じ、時代別の展示という方法は成功したとあってよいと考える。

#### (b) 指 摘

展示期間中に多く指摘されたのは、江戸時代の写本である『今昔物語』（関西大学図書館所蔵）を、古代に展示するのは混乱を招く、という点である。これは、私たちのキャプションの記述方法と解説にも問題があったため、展示期間中にキャプションを新しく作成し、差し替えることにした。また、『絵巻大江山』の展示背景が寂しいという指摘も多く受けたため、人物解説のキャプションを作成し、展示期間中に随時増やしていった。こういった改良を加えていったため、実習展最終日である金曜日時点での展示が最終形態となった。通常、博物館で開催される展覧会が日に日に手を加えられていくことはないため、いかに展覧会を開催するのが難しいことかということ、身をもって理解した。これは講義では伝えきれないことで、実習展をカリキュラムに組み込んでいる関西大学ならではの体験であった。

#### (c) インタープリテーション

私は黒田先生と、黒田先生の講義を受講する学生たちにインタープリテーションをする機会があった。黒田先生にインタープリテーションを行ったときは持ち時間を上手に使う事が出来たが、学生たちという大勢相手のインタープリテーションは思ったより時間がかかり、持ち時間を少しオーバーしてしまった。しかし、どちらのインタープリテーションでも、伝えなかった事は伝えられたと思う。また、黒田先生に相談した時に受けた指摘点を、学生たちに向けて行うときは改善することができた。

私たちの班では「展覧会に行ったら、邪魔されずに自分のペースで見たい」という意見の班員が多かった。そのため、「自分たちがされて嫌なこと」（＝インタープリテーション）を積極的にすることがあまりできなかった。しかし、今思うと、インタープリテーションを行わないにしてはキャプションの解説が不十分だったため、まったく知識のない見学者からすると、不親切な展示になってしまったことが反省点である。

#### (d) 班ノート

私たち鬼班では、情報共有の手段として、実習展期間中は「鬼班ノート」というものを作り、見学者から指摘された点や質問事項、自分たちで思ったことなどを共有することにした。この取り組みは概ねうまく機能したが、緊急性の高い事項もノートに書くことで満足してしまい、伝達が遅れるということもあった。しかし、質問事項はノートに書きだして全員が目を通すことによって、いつでも同様の回答をすることができ、人によって知識にばらつきがあるという事態は防ぐ事ができた。また、前述したように毎日のように展示に手を加えていたため、ノートで以前との違いをより明確にすることによって、当番ではなかった時の変化にも対応することができた。

### 3. 撤 収

#### (a) 片づけ

画びょうを抜いている最中で針が折れてしまい、壁に残った針が抜けなくなる、というハプニングが起きた以外は、問題なく片づける事が出来た。また、貸し出されていた道具も不備なく返却した。糊パネは展示期間中も改善のために少しずつ使用していたが、かなり多く残ってしまった。これは、キャプションなどの見通しの甘さが原因であるため、もっと明確に展示の様子を考え、キャプションを作るべきだったという反省点である。

#### (b) 返 却

雨の日を避けて返却したため、特に問題なく物品を返却し、借用書を受け取ることができた。また、関西大学博物館から借用した鬼瓦は、山口先生に回収していただいたため、特に私たちにできることはなかった。そのため、物品の返却はスムーズに行うことができた。

### 4. 総 括

#### (a) 図 録

今回の実習展の中で、一番負担が大きかったのは図録担当者だと私は思っている。展示品の解説は全員で分担したものの、図録のデザインに統一性を持たせるために、図録自体は担当者一人で作るしかなかった。図の配置なども担当者のみに任せため、統一性はあったものの、単調になってしまった部分もある。写真は図録担当者を中心として、複数人で意見を出しながら撮影したため、満足のいくものが撮れた。

#### (b) キャプション

キャプションはパネル担当者の管轄としており、担当者が一人で作業していたため、展示期間中にキャプションを差し替えるときに元のデータがない、という事態が起きたが、一番初期のキャプションデータは班長である私も共有していたため、なんとかそのデータを使用してキャプションを作成する事ができた。

#### (c) ポスター

ポスターはポスターで担当者がいたが、パソコンの扱いが不得手ということで、私が主に作業を行った。班員や家族、友人からも好評を得ており、また私も数多くの種類を作った中で検討に検討を重ねた自信作であったため、「教育的に良くないので、学芸員は無意識に避ける図柄」という指摘を講評で受け、目から鱗であった。私が意見を聞いたのは同年代ばかりだったため、教育的な観点から問題点を指摘されることがなかったのである。年配の方が見やすいようにと文字色と背景色には気を配ったが、年少者が見学に来ることは考えていなかったが故の失敗であった。

#### (d) 講評をふまえて

展示方法や図録、ポスターなど、講評では指摘を多く受けた。しかし、展示期間中に指摘を受けたものの、私たちでは改善することができなかった、改善のためのアイデアが出なかったこ



とに対する指摘が多かった。講評で初めて受けた指摘としては、前述したポスターの図柄に対する指摘、時代区分に近代がないことへの指摘などがあった。近代が時代区分の中になくことは、私の中ではまったく疑問に思わなかったため、指摘を受けて初めて気付いた。また、鬼門に関することを展示しながら、その分野を研究している森先生に聞かなかったことは手落ちだと指摘され、その時にはじめて森先生が鬼門について研究されているということを知った。これは、再三「先生を使え」と言われていたのにうまく先生方の力を利用できなかった、引いては先生方への事前調査不足であったとしか言いようがない。しかし、当初の目的であった「時代別の鬼への認識の変化」ということは伝えることが成功したと考えている。アンケートや講評の中でも認識の変遷は分かった、という意見をいただいたためである。

## 5. まとめ

班決めから撤収まですべて自分たちが主体で行う実習展は、想像していた以上に大変であった。しかし、正式な書類を作成したり交渉したりするという貴重な体験を通して、多くのことを学び、成長できた。また、この『移る時代は鬼ばかり』の展示は、完璧な展示とはほど遠いが、多くの方々からの協力を得て、私たち班員の現在持てる力を出し合った最善の実習展だったとも思う。一人では、倍の準備期間をかけてもこれほどの展示をすることができなかつただろう。私は、班員が協力して実習展を行う事が出来たことを誇りに思い、今回の実習展を通して得た知識や経験を、就職活動やこれからの人生にも活かしていきたい。

## I. はじめに

私はこれまで博物館といえば土器や遺跡から発掘された遺物などの考古資料や刀や甲冑、当時の文書などの歴史資料、当時の生活品である民俗資料をイメージすることが多かったように考える。しかし、この講義を通して、植物や昆虫などの生態系や化石・鉱物などを中心とした自然系のもの、宇宙や科学技術、力など科学的なもの、電車や飛行機、バスなど私たちの交通機関である交通科学的なものといったように博物館といっても幅広い分野にわたっているということを改めて考えさせられた。

また、実際に普段は見ることのできない博物館の収蔵庫を見せてもらうことで、どのように資料を保存しているのかについて知ることができた。他にも資料を借りる上での借用書の書き方や、梱包の仕方、実習展を行う上で必要な図録やパネル、ポスターの作成やインタープリテーションの仕方など、実際に学芸員が行う仕事の内容を自分たちも実践してみるといったように体験から多くの事を学ぶことができたと考える。したがって、約一年の授業を通して、学芸員になる上で自分が心がけたいことや学芸員を目指す後輩に対して伝えたいことについて大きく三つに分けて述べていきたい。

## II. 博物館実習や見学から学んだこと

### ①「見せる」ということ、「ストーリーをつくる」ということ

私が実際に実習展をやってみて一番頭を悩ましたことであり、たくさん工夫することができるのは「見せる」ということだと考える。二回生の博物館の授業でも簡単に学んだことではあるが、展示のコーナーには入口と出口があり、一つの「ストーリーをつくる」ことが大切である。つまり、来館者は展示自体見るのが初めてであるので、いかにして来館者の心をつかみ、展示を見終わって何かしら展示から学べたもの、得られたものを少しでも多く提供すること、伝えることが重要であると考えている。ストーリーには必ず起承転結があるものである。故に展示においても見せ場となるもの、山場となるものが必要であり、見せたいものをいかに目立たせるか、展示のメリハリをつけることが学芸員に求められるものであり、私が心がけたいことである。

実際に、実習展の展示のレイアウトを考える上で私は巻物や冊子物展示を行ったが、中が真っ白な展示ケースでは両方とも台に置いて展示しただけでは、今一インパクトに欠けていた。そこで先生からの助言を受け、考えたのが台を濃紺や赤のフェルトで包んであげることだ。これにより、展示ケースと台にメリハリがしっかりとつき、台の上のにせた巻物や冊子も前より見やすくなった。このことから色のコントラストも考えることで展示を生かすことができることを学んだ。

「ストーリーをつくる」ことにおいて、もう一つ重要なのはテーマやタイトルをはっきりと示すことである。展示においても同様で、どういうテーマで展示しているのか、タイトルと展示を一致させなければ来館者は何の展示なのかわからないし、あやふやなまま、ただ見て帰るだけになりかねない。したがって、学芸員は一番来館者に伝えたいこと（テーマ）は何かをしっかりと決

めて、タイトルをつけることが大切であり、それにあった展示を心がけるべきだと考える。

また、「ストーリーをつくる」上で最後に重要なのは順番である。順番が違うと話の流れが分かりにくいものであるが、順番通りだと筋道がしっかりして理解につながりやすいものである。展示においても同じことがいえ、展示ブースを見る順番がわかりやすいように配置することが大切であると考え。その際に気をつけておきたいのがブースを回る順番に合わせて、文字の字体も縦書きか横書きかを合わせる必要があるということである。また、字の見やすさにも配慮すべきである。例えば、字の大きさは適当であるか、書体は展示とあっているか、ふりがなはちゃんとふれているかといったように、誰が見てもわかるような心配りも大切であると考え。

最後に「見せる」という工夫において私が印象に残っているのが、博物館見学の際に訪れた交通科学博物館である。ここでは電車やバスなどの乗り物を中心に展示してあり、当時の駅が再現されている。主に小さな子どもや男の子向けに展示がしてあり、列車の運転ができたり、スイッチを押す場所が各地に設置されているなどのハンズ・オンが多い。また、パネルによる説明書きは少なく、代わりに映像やイラストでの説明が多かった。故に、「見せる」ということはケースに展示するだけでなく、実際に来館者にも触ったり、体験してもらおうといったような工夫も積極的に行っていくべきだと考える。また、文字が読めない人のために視聴覚器を導入するなどの工夫も「見せる」という意味では重要な手段だと考える。

## ②「協力し合う」ということ、「共有する」ということ

実習展を終えて改めて考えたことは、実習展を無事やり遂げることができたという達成感と安堵感を得られたのは、仲間と「協力し合う」ことができたからだったということである。図録やパネル作成において私たちは班全体で時代や作品ごとに役割分担をした。また、実習展ではインタープリテーションも行う必要があったため、それぞれが担当した作品を教え合うことで、自分も相手にわかりやすく教えるやり方や説明の仕方を学ぶことができ、逆に仲間からの解説を受けることで、作品の情報や解説を知ることができた。したがって、仲間と情報を「共有する」ことでインタープリテーションを行う際に、伝えたいことや解説する上で大事なポイントのずれが生じるのを防ぐことができたと考え。

さらに、実習展中には自分たち専用のメーリングリストや質問ノートを作成した。メーリングリストでは、連絡事項や何かあった際に全体に呼びかけができたりといったように、速やかに情報を共有するのに非常に役に立った。例えば、本来ならあってはならないことではあるが、パネルの解説に漢字の誤りがあるといったミスが発覚した場合は、速やかによびかけができ、修正することが可能であった。一方、質問ノートは実習展期間中に来館者から受けた質問や改善点などをその日の担当者が書きこんでいったもので、次の担当者がその内容を引き継いでいき、全体で共有できるようにしていた。したがって、学芸員は迅速な対応が必要であり、そのためにも情報を「共有する」ことが大切であると考え。

また、実際に展示を行う際の展示物の多くはコレクターなど他者から借りることが多いが、学芸員にはそういった他者との交流を深めることも重要であると考え。その際にはやはり礼儀が必要であり、やっと知り合えたその人たちとのつながりを大切にしよう心がけたい。

最後に館内の学芸員だけでなく、他の博物館の学芸員や博物館ボランティア、NPO スタッフな

ど「協力し合う」ことで、様々な分野をお互いカバーし合うことができ、イベントなどの催しごとが幅広く開くことができると考える。つまり、互いに「協力し合う」ことで博物館をより楽しく、活気あふれるものにすることができると考えるので、同じく大切にしていきたい。

### ③「幅広い層に楽しんでもらう」ということ

博物館により多くの人の来館してもらうためには、世代や性別を問わずに幅広い客層に興味を持ってもらうことが現在の博物館に求められているものだと考える。もちろん、そういった人たちの興味をひくようなテーマを設定することも重要ではあるが、私は展示だけでなく、それぞれの博物館が持つ独自の施設やサービスなどを積極的に進めていくことも学芸員にとって重大な課題であると考えている。

例えば、先ほども触れた交通科学博物館の展示は比較的低位置に展示することで、小さい子ども目線に合わせた工夫がなされている。また、大阪市立科学館では、親子で体験する実験教室などのイベントも開かれている。一方、琵琶湖博物館においては大人用と子ども用のパンフレットが用意されており、子ども用の方は文字よりもイラストでの表記になっている。また、駐車場から博物館までの道のりを利用してクイズコーナーの看板が何箇所か設けられており、子どもを飽きさせない工夫がなされている。さらに、屋上には昼食スペースが設けられていることから、子どもから大人まで親子二世帯が楽しめるような取り組みが感じられる。

そして、琵琶湖博物館では階段には展示ブロックや反射板、滑り止めといったように、小さな子どもやお年寄りがつまづかないような配慮がなされている。さらに、エスカレーターの水平部分を普通よりも長くすることで、急な上りにならないよう工夫もされており、子どもだけでなくお年寄りや障がいをもった人たちに対しても優しいつくりになっているのだ。

このようにどの来館者に対しても困難がないように十分に配慮することも博物館には求められるものであり、来館者にまた来たいと思ってもらえるような博物館づくりを心がけていきたい。

## Ⅲ. おわりに

博物館実習をふりかえって、博物館の裏側や、そこで働く学芸員の姿を知って自分の中で博物館の見方が大きく変わったように考える。一つの展示を成功させるために、莫大な時間を費やし、どのようにして来館者に分かりやすく、伝えたいことを展示に表現するのか、興味を引き付けるためのポスターのデザインはどうするのか、いかにして決められた予算の中でメリハリのついた展示にするのか、タイトルと展示は一致しているのか、パネルの背景と字体は合っていて、かつ経路にあるのか、など一つ一つを確認し、完成させるまでの苦労や努力は計り知れないものである。実習展を通して小さな気配りの大切さを痛感するとともに、自分たちが調べた成果を限られた時間で分かりやすく解説するといったプレゼンテーションのスキルも身についたように考える。そして、この一年学んだことを社会に出ても役立てられるようにこれからも心がけていきたい。

### はじめに

博物館とはどのような場所か。学芸員とはどのような職業か。私は博物館課程の授業を履修するまで、学芸員とは自分の興味のあることのみを研究し、その成果を学会で発表し、社会に向けて発信するために博物館という場所で展示を行っていると考えていた。しかし、現実における博物館や学芸員は想像以上に多様な業務に関わっており、その業務の多さが今日の博物館における一つの問題点となっている。

博物館が担う多くの役割の中でも重要なものは、社会関係資本（本レポートにおいて社会関係資本とは、主に信頼とネットワークのことを指す）と「きっかけ」を提供するという役割であるだろう。従って本レポートでは、一年間の博物館実習を通して、私が学んだことや現在認識していることをもとにしなが、社会関係資本と「きっかけ」を提供するために博物館と学芸員、さらには社会がどのような役割を担うかを考えたい。

### 博物館と学芸員の役割

博物館とは「きっかけ」を提供する場であるべきである。人々が何か分からないことがある際に、その分野に関連する博物館に行き、博物館で学習し、博物館で得た知識について各自で学習しなおし、またその知識を持って博物館に行く。博物館を良い状態で維持しようと考えれば、このようなサイクルが継続的に維持される必要があるだろう。しかし、「きっかけ」とは人々が学習する「きっかけ」だけではなく、人々がつながる「きっかけ」も含む。後者の「きっかけ」については後述する。

また、日本の学芸員の主な役割とは、資料を収集・保存（修復）し、その資料の展示を行い、それらについて教育を行うことである。また、後世のために資料を保存するだけでなく、新たな学説や保存・研究技術を発展させることも含まれるだろう。さらにこれらの業務と同時に、博物館の運営を行わなければならない。このような学芸員の業務の多さは、現在の日本の博物館が抱える大きな問題の一つであるだろう。

ここで、このような業務の多さが原因として考えられ、資料に悪影響を与えた例を挙げる。例えば、貸し出した資料を返却されたままの密閉状態で放置したり、石油製品と接触させたまま放置することで色移りや接着の原因となったり、資料を必要以上の力でしぼることで破損させたりするなど、資料にとって適切な方法で保存が実施されていないということである。これらは、学芸員の保存方法についての知識の欠如が原因であるが、保存技術について学ぶ時間が確保できたり、業務を分担できる環境が整っていれば事前に防ぐことができただろう。従って、学芸員の業務の多さがこれらを引き起こした根本的な原因として考えられる。

### 博物館と社会関係資本

ここで、もう一つの事例をあげる。ある日、一般の方の絵画ギャラリーが開催されていた。こ

のように自分たちの作品を持ち寄り開かれる展示会は、あらゆる場所で開催されているだろう。このような場は、人が集まり、学習し、その人たちにとっての生きがいや育む場になっている。今日、博物館でもこの事例に見られるような役割を担っている。それが、博物館の社会関係資本と「きっかけ」を提供するという役割である。

博物館は性質上、社会関係資本を生み出し、またこれらが存在しなければ成立しない。なぜなら、博物館と博物館相互の信頼やネットワークが維持されなければ、資料の貸し借りなどに支障をきたし、博物館運営が滞るからである。他方で、博物館と社会、博物館を通じた社会に存在する人と人、人と地域、地域と地域、といったネットワークも生み出している。

以下では、後者の社会関係資本、つまり博物館と社会のつながりに焦点をあてる。

### 社会関係資本と博物館・学芸員の役割

以上のような社会関係資本を提供するために、博物館側はどのような役割を担っているのだろうか。まず、学芸員の役割から考える。

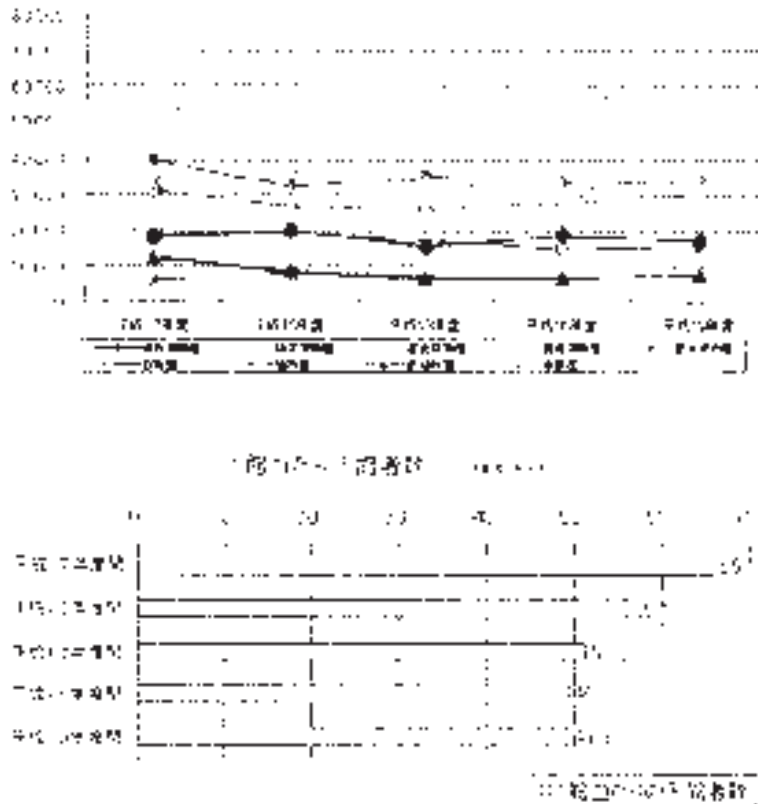
まず、近年、博物館を訪れる人数が減少していることを指摘しなければならないだろう。文部科学省のホームページでは、博物館への入館者数は平成7年度以降、ほぼ横ばいで推移しているが、博物館数が増加傾向にあるため、一館あたりの入館者数へ減少傾向にあると指摘している(図1)。つまり、博物館を介した人をつなげるネットワークが減少しているということを表しているだろう。

このような人々の博物館離れをどのように克服するか。しかしこのような状況の中、今日の博物館運営は費用対効果が重視され、最小のコストで最大の利益を得られるように考える傾向があり、またそのように強いられている。多くの博物館で入館者数などに関してのノルマが課されており、これも学芸員の負担を増大させている原因の一つであるだろう。学芸員は博物館を維持・存続させるために、このノルマ達成のための工夫を日々考えなければならないためである。

しかし、このノルマを達成するために、各博物館が創意工夫をし、新たな博物館の在り方が発展していくことは好ましい。例えば、追跡調査を行うことで来館者の興味・関心を調査したり、出張講座を行うことで、博物館を訪れることができない人や興味のない人に教育を行うと同時に博物館を知ってもらったり、博物館におけるイベントやコンサートの開催により新しい博物館の在り方を模索することなどが挙げられるだろう。また、このようなノルマ対策が、博物館が社会関係資本を提供する基礎となる部分も多い。積極的に講座やフィールドワークを開催することや、ボランティアを募るなど、普段は接点のなかった人同士がつながる「きっかけ」を提供しているからである。

ノルマと言われた際の利益とは、たいてい入館料やミュージアムショップから得られる経済的な利益であり、入場者数といった数値化された利益である。確かに博物館を維持していくためには、これらのように数値で評価される必要があるかもしれない。しかし上記のように、利益とは数値で表すことのできるものばかりではないだろう。例えば、博物館の提供する信頼やネットワークといった社会関係資本は、多くの人の利益となるが数値で表すことはできないだろう。今後の博物館運営の在り方を考える際には、この側面の重要性を博物館を運営する側の人間、つまり学芸員が認識しなければならない。

図1 入館者数の推移



出典：文部科学省ホームページ

次に、このようなネットワークを形成し、「きっかけ」を提供する場である博物館自体の役割を考える。なぜなら「きっかけ」を提供するためには、博物館という建造物の構成も重要になるからである。博物館の資料保存という役割と来館者の安全を確保するために、博物館という建物は多くの要望が課される。例えば、通路は広く、できるだけ平面で段差を減らすなど、バリアフリーのように通常の建築物においても配慮しなければならないことを初めとして、燻蒸室の場所や資料の導線を考慮しての収蔵庫と展示室の配置、床面積を増やすための中二階など、博物館独特の配慮も多くされなければならない。

これに加えて、「きっかけ」やネットワークを重視するのであれば、人が集まりやすい博物館をつくる必要がある。ミュージアムコンサートを行うのであれば広めの多目的室やホールを、講座を開講したり、上記の事例のような一般人向けのギャラリーのために開放したりするのであれば、教室のような空間を備えていなければならない。しかし、これらの条件を満たすことよりも、建築家の意向に沿ってデザイン性を優先し、「きっかけ」を提供する場としての博物館という役割を十分に備えていない博物館も多いのではないだろうか。

## 社会関係資本と社会の役割

それでは一方で、博物館から数値で測定できない利益を得ている社会は博物館に対してどのような役割を担っているだろうか。上記でも述べたように、博物館には多くのノルマが課されており、資金不足でもある。この経済的なノルマは、市民が博物館に足を運ぶことでも達成でき、そのことが博物館の維持にもつながる。

また、市民が博物館に足を運ぶことで、経済的な利益をもたらすだけでなく、博物館や学芸員に社会とのつながりを認識させることができるだろう。例えば、実習展の際のことであるが、来館者数が少なければ、なぜ来館者が少ないかについて考える機会になる一方で、企画運営や準備した側のモチベーションの低下を引き起こす。従って、一人でも多くの人が来館することは、学芸員のモチベーションに直接的に良い影響を与え、より良い博物館運営に間接的に影響を与えると考えられる。つまり、社会の側も博物館や学芸員に対して、数値化できない利益を提供することができるということである。

以上で述べたように、社会関係資本を提供する博物館であるためには、博物館側の人間と社会の人間が協力する必要があるだろう。

## おわりに

今日の学芸員の業務は多く、資金不足に陥っている博物館も多くあり、博物館は苦境に立たされていると言えるだろう。このような状況の中で、社会関係資本を提供することのできる博物館であり続けるためには、学芸員の担う役割だけではなく、社会の担う役割も重要である。それは、博物館と社会（民衆）が協力し「館」民一体となることによって達成されるだろう。また、このような博物館の側面を支えるための新たな制度づくりが、今後の課題になると考えられる。

## 参考文献

文部科学省ホームページ

[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/01\\_1/08052911/1312408.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/01_1/08052911/1312408.htm)（最終閲覧2013.1.14）



## 序 論

平成24年度の博物館実習課程の中で、11月11日から16日までの6日間、関西大学博物館において、私達学生の手で展示を行うという趣旨に基づいた実習展が開催された。6つの展示テーマに分かれた中で、私を含めた16人の学生で「絵本」というテーマを設定し、これに取り組んだ。今回はこの実習展について、展示後の講師の方々の講評をふまえつつ、「絵本」班の展示における改善点や、それに至るまでの反省点を考えてみたい。また、博物館実習という講義全体を通して私が考えた、現在の博物館像について論述していきたいと思う。

## 博物館実習展について

### 1 展示のコンセプト

私達の展示における最大のコンセプトは、絵本を「読む側」と「作る側」という、2つの立場の視点から観察するということであった。これは、人数の関係上、展示スペースが他の班の2倍設けられていた私達だからこそできたテーマ設定だったと感じる。最終的に、読み手側の展示では、絵本の過去から現代までの移り変わりを概観し、作り手側においては、絵本に施された工夫や、絵本の制作過程を展示するという方向性に定まった。

しかし、この展示の大きなベクトルを決定するという作業が、個人的には、実習展に先立って話し合わなければならなかった論題の中で、最も難航した部分だと考えている。前述した通り、私達の班は合計16人という、他に比べるとかなりの大人数で成り立っており、歴史、美術、哲学等といった、様々な専門領域の学生が集まっていた。そのため、全員が納得できる結果に持ち込むことが大変難しく、また、あまり議論の場を持つこともできなかったのも、最終的に東京実習の最中まで、具体的な展示のコンセプトを決めることが出来なかった。それは今振り返ってみても大きな反省点だと言えるだろう。展示の最も核になる部分であったのに、幾分か具体的なテーマを定めるのに時間を費やしすぎたように思う。

### 2 展示についての解釈統一と情報共有

コンセプトの決定に時間がかかりすぎてしまったことが、後々班員全体でのテーマの認識統一にも手間取ってしまった要因の1つのように感じる。それは、「読む側」、「作る側」という2つのコンセプトの下で、班の中でも2つのチームに分かれてしまったことが原因の1つとしても挙げられると思う。決して2チームに分かれたことが問題だったという訳ではない。むしろ、あまりの大人数の中で動いていることの方が、自分のすべきことを見失ってしまう危険性を孕んでいたのではないかと思う。しかし、結果的に2つのチームに分かれたことにより、お互いの進捗状況を確認しあい、班の中で情報を共有することが、より一層うまくいかなくなってしまったのではないかと感じる。これは教員の方にも指摘されたことであるのだが、それぞれ自分の仕事さえやっていたら、他は関係ないという意識が、各自少なからずあったように思う。

私達はそれぞれの連絡を行う際には、基本的に一斉メール、または関西大学のSNSを利用して。しかし、これでは本当に全員が任意のトピックについて確認したのかは分からないし、それに対してきちんとレスポンスをする人は限られていたように思う。連絡事項や提案がある場合には、当たり前のことであるが、それに対して全員がきちんと何かしらの形で返答をすべきであり、そこで活発に意見交換をすべきであったと考える。それがあまり徹底されてできていなかったがために、私達の班では前述の通り、展示のコンセプトに対するそれぞれの考えに差が出てきてしまったり、お互いのチームの間で、現在どういう状況で資料集めが進んでいるのか、どのような流れで展示を行おうとしているのかという基本的なことまでも、はっきりとしたことが分からないという状態に陥ってしまっていた。つまり、何のためにどのような資料を借りてきたのかも、後に認識を統一させる必要があった。

このような経験から私が博物館実習展を通して学んだことは、大きい小さいはあれど、チームとして何か1つのことを成し遂げていくためには、相互間での情報共有が何よりも大切なのではないかということである。それはインタープリテーションを行った際に痛切に感じたことでもある。その資料について、借りてきた人と同じくらいの知識を身に付け、それがこの展示の中で、どのような立ち位置にあるのかを把握していないと、来館者に納得のいく、確信を持った説明が出来ない。間違った情報を与えることは決してしてはならないことである。それはもし学芸員という職に就いたとして、同じことが言えるであろうと思う。

### 3 展示における講評と改善点

概ね、全体としては好評だったのではないかと考えている。しかし今回、私が最も改善しなければならないと思ったのは展示解説の部分についてである。後に集計されたアンケートの結果に基づいても、展示内容や展示の見やすさに対して、展示解説の項目の評価があまりよくはなかったことに目を向けなければならない。さらに最終日の講師陣の講評からも、図録に比べ、キャプションの内容が薄かったということは指摘されていた。私自身、図録編集を担当していたので、それは常々思っていたことではあった。キャプション内容については、話し合うための時間的余裕が無く、図録内容を踏襲した上で、文字量をかなり減らし、ひとつひとつの資料の解説というよりは、全体的な説明のようになってしまったということが言えるだろうと思う。見ているだけでは分からない展示になってしまっただけでは、より専門的な知識を得ようとしている来館者にとって、消化不良な内容になってしまう。係員に尋ねるにしても、他の来館者の対応にあたっている時には、解説を行うことが出来ない。知識を求めてやって来た来館者の方のために、「見て分かる、聞いてより深く理解できる」ような展示を目指すべきではなかったかと考える。そのためには、展示を企画する立場ではなく、来館者の視点に立った展示スペース作りを行わなければならないと感じた。

そういう意味では、展示の導線にもかなり気を配った。私達の班は、絵本というテーマの中でも展示内容が2分していたため、読み手側の展示から作り手側への流れ（逆もしかり）をどのように誘導するかという問題が大きく取り上げられたが、結局のところは、見る人によって展示ケースの回り方は様々であった。最低限、最初のケースと終わりのケースのどちらから見ても分かるようにして繋げ、間にハンズオンのコーナーを設置することで2分化させたが、ここは課題の

残るところとなった。

余談ではあるが、このハンズオンコーナーを設置したのは良い試みだったのではないかと考える。実際に案内のために展示室にいた際にも、多くの人が実際に手に触れて、絵本、その中でも特に仕掛け絵本の面白さを実感してもらえていたように思う。また、4面ケースの中に入れていた、メリーゴーランド型の仕掛け絵本と同じ型の絵本を置いていたために、解説を連動させることが出来て、観覧車にもより分かりやすかったのではないかと感じた。

しかし、もう1点、ここで触れておきたい改善すべき点として、やはり展示の流れを挙げておきたい。「読み手側」の展示において、歴史がとんでいることを、何人かの観覧車からも指摘されていた。さらに、講評やアンケートの中に、「読み手の立場からの展示というよりはむしろ、ただ絵本の歴史という印象を受けた」という意見が含まれていたことに注目したい。これも班内でチームが分かれてしまったがために、あまり話し合う余地がなかったところであった。このあたりにも、私達1人1人の認識の差が表れてしまっていると感じる。

博物館実習課程において、夏休みに入ってから2泊3日の東京実習が行われたが、その際、東京国立博物館を見学する機会が設けられていた。そこで実際の展示を見て思ったことに、「歴史の流れ」についての展示を行うには、それこそ東京国立博物館のように、実際の「物」を多く集め、それを展示するだけの規模がなければかなり難しいのではないかとということもある。もし、本当に絵本の歴史について展示を行うのであれば、展示ケースを2面ともそれにあててもよかったかもしれないし、もっと別の展示を考えることもできたかもしれないと考えた。しかしそこは、やはり美術をやりたい人もいれば、歴史をやりたい人もいた。そのような意味で、普段触れ合えない他学部の、興味の方向が違う人達と行動を共にしていくことの難しさを実感したように思う。展示を2つに分けたことが、その表れのように感じた。

#### 4 博物館実習で得たもの

実習最終日の講義で講師の方がおっしゃっていたように、この博物館実習はまさに、社会に出た時に最も必要になる信頼関係、人間関係を作り、礼儀を持って人と接するために重要なことをたくさん学ぶことのできた授業だったと思う。1つの展示を作り上げるために、たくさんの外部の方と触れ合い、交渉する機会を持ち、理想と自分達のできる限界の間で悩んだことも、今となっては充実した時間だったと思うことが出来る。そしてあの実習展が、今の私達の限界だったのだと思う。やりたいこととやれることは違う。しかし、いかにできる範囲で、その理想に近づけていくために努力するかが大切なのだと、改めて実感したように思う。

#### 現在の博物館事情を考える

最後に講師の方から出た、「観光のための美術館」という言葉が、私の中でとても印象に残っている。私達の多くは、パリに行けばまずルーヴル美術館に、ロンドンに行けば大英博物館に足を運ぶのではないだろうか。しかし、現在日本では、あまり博物館というのは身近なものではないようなイメージがある。大きな特別展、巡回展には多くの人を訪れるが、あまり常設展まで見て帰るといふ人は少ないのではないだろうか。

原因の1つに、そもそも観覧料が高いということが挙げられると思う。先ほど例に出した大英

博物館等はそもそも観覧にお金は必要ない。今の日本の現状でそこまで行うのはさすがに厳しいと思うが、外国のように、ミュージアムショップやカフェ等の事業にもっと力を入れて、それを運営費として少しでも当てられないのだろうかと考えた。入館者以外でも使用することが出来るなら、それは資金源になるように思う。

やはり、観光としてその土地の美術館、博物館に人が訪れるようになれば、それは新しい地域発見にも繋がり、より博物館に足を運んでもらう機会も増えるだろうと思う。この博物館実習で様々な博物館の現状を学習し、1度、今までの慣習にとらわれず、新しい目線で博物館を概観してみることも必要なのではないかと感じた。そうして、より多くの人々が、自国の芸術、文化に、興味関心を持ってもらうことができれば、それはさらに私達の生活を豊かにしてくれるだろう。